第 4 回全国マスジド（モスク）代表者会議の記録

第 4 回全国マスジド（モスク）代表者会議

「東日本大震災と被災者支援活動」

2012 年 2 月 12 日

小島　宏・店田　廣文　編

February, 2013

早稲田大学アジア・ムスリム研究所
Institute for Asian Muslim Studies
Waseda University, Tokyo, Japan

目次

目次・・・

序

本報告書は 2012 年２月 12 日に早稲田大学（早稲田キャンパス）で開催された第４回全国マスジド（モスク）代表者会議「東日本大震災と被災者支援活動」の会議録である。第３回は東日本大震災の５日前に開催され、第４回は東日本大震災後初めて開催されたものであったため、このようなテーマが選ばれた。ムスリム、特に外国出身のムスリムは東日本大震災で支援を受けた側だと思われがちであるが、実際はムスリムだけでなく、非ムスリムの被災者の支援活動を実施した側でもあったことを明らかにすることを目的として開催されたが、本報告書がそのような目的の達成に多少とも寄与することができれば幸いである。

第２回までのモスク代表者会議は早稲田大学人間科学学術院店田廣文教授のアジア社会論研究室が主催し、第３回は同教授が所長を務める多民族・多世代社会研究所が主催した。しかし、諸般の事情から、第４回については第３回の際に共催機関として運営作業の大きな部分を担ったアジア・ムスリム研究所が主催することになった。内外のムスリムが「モスク」ではなく「マスジド」という呼称を使うようになっている一方で、継続性を保つ必要もあることから、第４回に主催機関が変更された機会を捉えて、これまでの「モスク代表者会議」から「マスジド（モスク）代表者会議」に名称変更した。また、今回は代表者会議直前に早稲田大学のムスリム学生懇談会を開催したこともあるため、報告を希望されたマスジド代表者だけでなく、ムスリム学生連盟（MSAJ）の代表者にも支援活動について報告していただいた。なお、当日の参加者はマスジド等の関係者 21 名、それ以外の参加者 52 名（うち主催者側 15 名）であった。

第４回マスジド（モスク）代表者会議の開催については後掲の各会議運営者ならびに各関連プロジェクトのご支援により可能なったので、謝意を表したい。また、本会議録作成・刊行についてはアジア・ムスリム研究所に対する重点領域研究「アジアにおけるムスリム・マイノリティと非ムスリム・マジョリティの共生に関する国際比較研究」研究費、科研費基盤Ｂ「東アジア諸国におけるムスリムと非ムスリムの共生」（23330170）および「人間文化研究機構（NIHU）プログラム　イスラーム地域研究」の助成を受けている。最後になったが、本会議録の編集についてはアジア・ムスリム研究所の招聘研究員である野田仁（イスラーム地域研究機構次席研究員）・砂井紫里（イスラーム地域研究機構研究助手）の両氏にお世話になったので、記して謝意を表する次第である。

2013 年１月

早稲田大学アジア・ムスリム研究所
小島　宏
店田　廣文

会議運営者一覧

（所属は 2012 年 3 月現在）

小島　宏	早稲田大学社会科学総合学術院・教授
店田　廣文	早稲田大学人間科学学術院・教授
西村　淳一	イスラーム地域研究機構・主任研究員／研究院准教授、人間文化研究機構地域研究推進センター研究員
野田　仁	イスラーム地域研究機構・次席研究員／研究院講師
砂井　紫里	イスラーム地域研究機構・研究助手
岡井　宏文	早稲田大学多民族多世代社会研究所・招聘研究員

関連研究助成プロジェクト一覧

本会議および本報告書は、以下の研究助成による研究成果の一部である。

・早稲田大学重点領域研究「アジアにおけるムスリム・マイノリティと非ムスリム・マジョリティの共生に関する国際比較研究」研究代表者：小島　宏

・「人間文化研究機構（NIHU）プログラム　イスラーム地域研究」（早稲田大学拠点）研究代表者：桜井　啓子

・平成 23～25 年度科学研究費補助金基盤研究（B）・課題番号 23330170「東アジア諸国におけるムスリムと非ムスリムの共生：ライフスタイル変容の比較研究」研究代表者：小島　宏

・平成 24～26 度科学研究費補助金基盤研究（C）・課題番号 24530669「滞日ムスリムに関する住民意識の 3 地域比較調査研究と多文化政策再考」研究代表者：店田　廣文

会議プログラム

早稲田大学アジア・ムスリム研究所
早稲田大学多民族・多世代社会研究所
「人間文化研究機構（ＮＩＨＵ）プログラム　イスラーム地域研究」早稲田大学拠点

2012 年 2 月 12 日(日)
於: 早稲田大学・早稲田キャンパス２６号館（大隈タワー）702 号室

「東日本大震災と被災者支援活動」
13:30-13:40　　開会の挨拶（早稲田大学アジア・ムスリム研究所長　小島宏）
13:40-13:45　　黙祷

報告
13:45-14:00　「大塚マスジドの支援活動」（永井彰、アキール・シディキ、ハルーン・クレイシ）
14:00-14:15　「戸田マスジドの支援活動」（ライース・シディッキ、松下基彦）
14:15-14:30　「ヒラー・マスジドの支援活動」
（ジャミル・アマド、アフマド前野、アブドッラー・アブドルアジード）
14:30-14:45　「ムスリム学生連盟の支援活動」
（MSAJ よりワリード・オスマーン、ファディ・アル・ナジャル）

14:45-15:15　休憩と礼拝　　14:56　サラート（ASR）

15:15-16:30　パネル・ディスカッション
司会：小島宏
パネリスト：マスジド代表者等の方々
　　Assalaam Foundation（アッサラーム・マスジド）より、ムハンマド・ユースフ
　　つくばイスラーム教会より、ムハンマド・ハリール
　　新居浜マスジドより、浜中彰　　ほか
16:30-17:00　総合討論
17:00-17:10　閉会の挨拶（早稲田大学多民族・多世代社会研究所長　店田廣文）

参考：　MAGHRIB　17：19　　ISHA　18：41
礼拝室：26 号館 802（男性）・803（女性）号室

"Support of the Great Earthquake Victims"

Organized by Institute for Asian Muslim Studies, Waseda University

Institute of Multi-ethnic and Multi-generational Societies, Waseda University

NIHU Program Islamic Area Studies, IAS Central Office at Waseda University

Date February 12th (Sun.) 2012, 13:30-17:30

Venue Waseda University, Waseda Campus, Bldg. 26 (Okuma Tower), Room 702

Program:

13:30-14:40 Opening Remarks (Hiroshi KOJIMA, WU Institute for Asian Muslim Studies)

13:40-13:45 Silent Prayer

Presentations

13:45-14:00 Otsuka Masjid (Akira Nagai, Aquil Siddiqui and Haroon Quresh)

14:00-14:15 Toda Masjid (Raees Siddiqui and Motohiko Matsushita)

14:15-14:30 Hira Masjid (Jamil Ahmad, Ahmad Maeno and Abd Allāh Abd al-Azid)

14:30-14:45 Muslim Students Association of Japan (Fady S.K. Alnajjar and Waleed Osman)

14:45-15:15 Break/Salat (ASR 14:56)

Panel Discussion

15:15-16:30 Chair: Hiroshi KOJIMA

Panelists: Representatives of Masjids in Japan

Mohammad Yusuf (Assalaam Foundation)

Mohammad Khalil (Tsukuba Muslim Residents Association)

Akira Hamanaka (Niihama Masjid) and others

16:30-17:00 General Discussion

17:00-17:10 Closing Remarks

Hirofumi TANADA, WU Institute of Multi-ethnic and Multi-generational Societies

Notes : MAGHRIB 17 : 19 ISHA 18 : 41

ROOM for Salat : Room 802 (for male) and Room 803 (for female)

Contact : Institute for Asian Muslim Studies

E-mail: asian-muslim@islam.waseda.ac.jp

URL: http://www.kikou.waseda.ac.jp/ias/research/ams.html

主要参加者一覧

（1）マスジド代表者など

アフマド　前野	ヒラー・マスジド
ジャミル・アマド	ヒラー・マスジド
アブドッラー・アブドルアジード	ヒラー・マスジド
永井　彰	大塚マスジド
アキール・シディキ	大塚マスジド
ハルーン・クレイシ	大塚マスジド
松下　基彦	マディーナ・マスジド・戸田
ライース・シディッキ	マディーナ・マスジド・戸田
ワリード・オスマーン	MSAJ
ファディ・アル・ナジャル	MSAJ
イシラトゥ・アリー・ハーシム	ダールルアルカムマスジド
ハーフィズ・モハンマド・ズルフィカール	バーブル・イスラーム・マスジド
浜中　彰	新居浜マスジド
ファイアーズ・アフマド・ムガル	クバー・マスジド
ムハンマド・ハリール	つくばイスラーム教会
ムハンマド・ユースフ	アッサラーム・マスジド

（2）主催者側

小島　宏	早稲田大学社会科学総合学術院・教授
店田　廣文	早稲田大学人間科学学術院・教授

Name of Participants

(1) Representatives of Masjid etc.

Ahmad MAENO	Hira Masjid
Jamil Ahmad	Hira Masjid
Abd Allāh Abd al-Azid	Hira Masjid
Akira NAGAI	Otsuka Masjid
Aquil Siddiqui	Otsuka Masjid
Haroon Quresh	Otsuka Masjid
Motohiko MATSUSHITA	Toda Masjid
Raees Siddiqui	Toda Masjid
Waleed Osman	Muslim Students Association of Japan
Fady S.K. Alnajjar	Muslim Students Association of Japan
Ishrat Ali Hashmi	Dar ul Arqam Masjid
Hafiz Mohammad Zulfiqar	Babul Islam Masjid
Akira HAMANAKA	Niihama Masjid
Fiaz Ahmed Mughal	Quba Masjid
Mohammad Khalil	Tsukuba Muslim Residents Association
Mohammad Yusuf	Assalaam Foundation

(2) Promoters

Hiroshi KOJIMA	Professor, WU Faculty of Social Sciences
Hirofumi TANADA	Professor, WU Faculty of Human Sciences

会議録[1]

開会挨拶

小島：アジア・ムスリム研究所の小島と申します。よろしくお願いします。

一応、最初の案内に書いてあった通り会議中は写真とか録音はご遠慮いただきたい。会場係の方が撮らせていただきますけれど、それ以外の方はご遠慮いただくようにお願いします。終わってからとか、前はまだ結構です。

前回まで「モスク代表者会議」という名前でやっておりましたが、今回は各マスジドの方々、マスジドと自称されているところが多いので「マスジド（モスク）代表者会議」ということに改めさせていただきました。いずれは「モスク」という名称は無くなるかもしれません。前回までは早稲田大学人間科学部の店田廣文教授、後ろに座っておられますけれど、あの方が中心に開催されていたのですが、私も一応関係させていただいていたわけですが、今回は店田教授のご意向で私どものアジア・ムスリム研究所が中心に開催することになりました。一応引き継ぎは受けたのですが、皆様方との意思疎通とか上手くいかなかったところをお詫びいたします。どうも申し訳ありません。それから本日の会議においても今までみたいに上手くいかないところもあるかと思いますが、後ほどメール等で教えてくだされば来年度以降改善したいと思いますのでよろしくお願いします。

私どもの研究では早稲田大学における研究だけではなく教育にも一応貢献するということを謳って作られたものですので、今回の会でも学生代表の方々ですね、MSAJ の方にもお越し頂きましたし、この会議の直前には早稲田大学のムスリムの学生さんたちに集まっていただいて懇談会を開催しております。それからいずれ仮称ですけど、「ムスリム学生代表者会議」みたいなものをやりたいと思っていますので、今日お配りしたアンケート用紙にモスク、そのような学生団体のところもあるかと思いますが、お近くにあるそういう学生団体の名称とか代表者とか連絡先を教えていただけると、そういう会をやるときに助かるのでよろしくお願いします。ついでに、今私の研究所でやっているハラール・レストランの調査とかの情報をいただきたい。今回は主として東京都内でやっていますけれども、皆様全国からお越しなので都内以外のところの情報はなかなか分からないのでハラール・レストラン、それからハラール食品店についての情報も教えていただけると助かりますのでよろしくお願いします。

今回のテーマですけれど、「東日本大震災と被災者支援活動」ということでやらせていた

[1] 以下、会議録については、当日の録音に基づきできるだけ内容を正確に再現するよう努めたが、なお誤りが見られることも考えられる。ご容赦いただきたい。また録音が不鮮明な箇所やアラビア語の文言については一部を省略して掲載した（省略部分は、「［…］」として示す）。ご了承いただければ幸いである。

だきますが、昨年は 3 月 6 日の日曜日にこの第 3 回、その時は「モスク代表者会議」と呼んでおりましたが、開催させていただきましたが、その 1 週間もしないうちに大震災が起こりまして、被災された方々にお見舞いを申し上げます。また亡くなられた方にお悔やみ申し上げたいと思います。この後で、参加者皆様のやり方で結構ですので、黙祷を捧げていただければと思います。亡くなられた方々に対してですね。

それから、お詫びですけれども最初のプログラムには仙台マスジドの関係者の方が来られるということで連絡差し上げたのですが、ご都合で来られなくなりまして、その代わりにこのような報告用の原稿というんですか、それをいただきましたので後ほどお読みになっていただければありがたいと思います。この挨拶の最後に時間があればちょっと読みますけれど、あまり、ほんの一部しか読めないと思います。それから、あともう一つお詫びですけれども、サラートの時間を守らないといけないために今全部読めないというのもあるんですれども、そのサラートの場所が当初 7 階で予定していたんですけれども、部屋が取れなくて 8 階の方になりましたので、申し訳ありませんが 8 階の方にいらっしゃってください。男女分かれて、男性が、すいません、プログラムが間違えてました。男性の方が 801 です。それで女性用が 803 はいいんですね。すみません。お詫びばかりで申し訳ありません。だから、男性の方は 801 の方にいらしてください。

あとプログラムですが、一応最初の報告については日本語の 50 音順に並べてあります。このうちの大塚マスジドさん、ヒラー・マスジドさん、それからムスリム学生連盟さんについてはこちらの方からお願いして、戸田マスジドさんについては、すべてのモスクにご希望を伺ったところ、戸田モスクさん以外がなかったので、すみません、戸田マスジドさん以外がなかったので、戸田マスジドさんだけがここに載っております。ただ遅れてつくばイスラーム協会の方からちょっと別の形の支援について話したいというお話があったのでパネル・ディスカッションの方で少しやや長めに、つくばイスラーム協会の方からお話しいただければと思います。あともちろんパネル・ディスカッションの方で、各マスジドさんの方で被災者活動とか考えるところとかをおっしゃっていただいて結構です。パネル・ディスカッションの方は、これは申込み順で名前が書いてあります。特に他の意図はありません。これも申し込まれたところだけしか載せていません。

あと遅れましたけれど、これは ICOJ からいただいたもので、もう既にみなさんお取りになっていると思いますが、どうもありがとうございます。とりあえずそんなところです。

それではちょっとあと 1、2 分ありますので、仙台マスジドからいただいたものを少し読ませていただきます。[2]

『最初の 3 月 11 日のことですけれど、あの日は金曜礼拝の日でした。私はマスジドに誰

[2] 全文については 54 頁以下を参照。

もいなくなったので後片付けやタオルの洗濯をしてから、マイカーの給油のため国道 48 号線を走行中、あの大地震に遭遇しました。揺れが収まってからすぐマスジドへ引き返し、被害の状況をチェックしましたが、本棚や食器棚などの転倒や若干の損傷がありましたが、津波の被災地に比べたらごく軽度なものでした。11 日の夜、何人かのインドネシアの男女留学生がアパートなどへ帰るのが怖いと言ってマスジドへ泊りました。さらに建物内は怖いと言って、敷地内に駐車した車で一夜を過ごした者もおりました。12 日の日、昨日の地震による地割れから敷地内を走っている水道の配管 3 か所から漏水が見られ、応急修理やマスジド内外の片づけをして過ごしました。夕刻には仙台にいるインドネシアの留学生とその家族全員が東北大学の留学生会館に緊急招集され、来仙した大使館員の説明の後、チャーターしてきたバスに分乗して東京へ行ってしまいました。他の国の留学生も数日のうちに帰国したり、あるいはまず仙台を経由して日本海側を南下し、東京や大阪へと避難しました。当仙台マスジドを支える会員の 80～85%くらいは東北大学の学部および大学院の留学生ですが、彼らの大半があっという間にいなくなり、帰国できない事情の国の学生が残った形になりました。』

すみません、最後の方に行きますけれど、色々な支援のお手伝いをされたというお話があって…

『以上のように仙台マスジドの行ったことといえば、被災地への道案内と救援物資の受け入れ、それらの配送、配布ぐらいでして、各地の皆様のご努力、ご献身に比べたら恥ずかしい限りです。願わくば、皆さんの心が被災地の皆さんに伝わり、彼らの復興の力になってくれれば幸いです。』

最後に固有名詞が書かれているのでそこは省略しますが、

『全国各地はもとより、世界各地のムスリム諸兄、友人・知人らからも実に多くの義援金や救援金を送っていただいたり、実際に持ってきていただいたり、お見舞いの電話をいただいたりしましたことに対し、被災地の住民の一人として改めて衷心より御礼申し上げます。本当に有難うございました。ジャザーカッラーハイルン』

どうもここで終えさせていただきます。

それでは黙祷に入りたいと思いますのでお手数ですが起立していただいて、皆様それぞれのやり方で結構ですので 1 分間ほど黙祷を、東日本大震災で亡くなれた方々への黙祷をしていただければと思います。

Please stand up for the silent prayer for one minute for the deceased in the earthquake, the great

earthquake. Thank you.

じゃあ、始めます。ではこれから 1 分、よろしくお願いします。

—黙祷—

どうもありがとうございました。サラートの時間がもちろん決まっていますので、14 時 45 分には休憩に入りたいと思いますので、これからの 4 つの報告ですね、やり方はそれぞれのマスジドあるいは団体にお任せしますけれども、15 分で終えるようにお願いします。よろしくお願いします。では、大塚マスジドさんの方から準備を。

大塚マスジド

永井：私、大塚マスジド、というよりも宗教法人日本イスラーム文化センターの永井でございます。この度、お時間をいただき、大塚マスジドが行った、日本イスラーム文化センターという長ったらしくいうよりも大塚マスジドということで皆さんご理解いただいてるので、大塚マスジドということで説明させていただきます。この度の大震災では、東京においても電車が止まったりして時間的な非常な混乱を起こしたと。それで今日は、最初に私をここに立たせたということは時間の混乱を起こす源を作っちゃったのではないのかなという心配はちょっとありますけれど、何とか時間内か時間をちょっとすぎるくらいで説明させていただきたいと思います。

初めに、金曜日の礼拝を済ませて私は家に帰る途中、あと 20m ばかりで家に着こうかというときにガサガサガサガサという、すごい重機で家をぶっ壊しているような、そういう音が聞こえてきたわけです。それで私は解体中の家はどれなんだとキョロキョロしたんですけれども、それらしいものは見当たらない。でもそのうち揺れてきたんですね。それでこれは地震だっていうことがわかって、たまたま桜並木のところに居ましたので桜の木のところに手をかけまして、自分の安全を図ったということでございます。それから揺れが少し収まってきたので、ちょっと家の方に進んだら、そこのまた次の桜の木のところにいた私のような年配の人が、ちょうどそこは神田川なんですけれども「神田川の水、すごいですよ。こんなんになってますよ。」と。それを私も見せていただいて、これはすごいもんなんだなということを、揺れはともかく、その神田川の水の波打っているので感じたわけでございます。それからマンションの裏口から入ると、エレベーターは止まっておりました。それからロビーのシャンデリアがですね、こう、すごい揺れてるんですね。ということは、私は揺れは収まったと思っていたんですけれど、まだまだ揺れてる最中だったということです。家には私の妻が一人でいるはずでございますので、非常階段を使ってともかく昇りました。それで家に着きましたら、地球儀とか、そういうちょっと座りの悪いものは床に落っこちてはいましたけども、食器棚とか本棚とかそういうものが倒れた様子もな

く、それからテーブルの上の物が落っこちた様子もなく、それほど被害のない状況でございました。30cm ほどずれたテレビの台を元の位置に戻しましてスイッチを入れたところ、仙台平野の農地を襲う津波を空撮している風景が出て参りました。ビニールハウスが冠水するということはおそらく津波の高さは 3m 以上、もしくは 5m とかそういうものであったろうと思います。スマトラ沖地震というのが少し前にあったわけですけれども、その時には私は東ティモールというインドネシアの隣の国におりました。インドネシアのテレビ放送で一部始終を見て参りましたので、その時の津波もすごいものだということは分かるのですけども、今回の物的な被害という点から考えるならば、これは、この大震災は有史以来初めてのことであろうと私は思います。原発事故というものを数に数えなくても、船舶、鉄道、自動車、公安他公共の建物、工場、民家といったものの被害の物的量、そういうものでいうのはこれまでに歴史的にないことだろうと思います。それからただ幸いなことに、高速道路であるとか基幹の道路、それから新幹線、基幹の鉄道網、そういうものが津波の被害を受けるよりも標高が高いところにあったということで、そういうことは幸いだったと思います。有史以来の災害にあたって、テレビを見た人、特にですね、誰でもが何かしなきゃいけないと思ったに違いないと思うのですが、ところがいったい我々に何が出来るのだろうかという、全く思いもつかないという、そういう状況であったかと思います。それで、今回の災害に対する救援活動の前に、大塚マスジドが行ってきた他の救援活動というものが関連付くものですから、それについてお話しさせていただきます。大塚マスジドの建物というのは古い印刷会社を買い取ったもので、それを改装しまして 2000 年の 2 月 4 日に開館しました。ところが 2001 年に米軍・NATO 軍のアフガンでの戦闘準備が始まるということで、大量の難民が隣国であるパキスタン・イランに逃れてきました。大塚マスジドではパキスタンのイスラーム団体などとコネクションがあってパキスタンを逃れてきたアフガニスタン難民への冬物の古着であるとか、そういうものを集めて現地に送る。それで現地のイスラーム団体の協力を得て、実際に難民に届けるというようなことをやって参りました。この時にはアフガン難民のニュースというものが日本中に溢れかえっていましたから、それに対する協力者がたくさんありまして、最初の年にはコンテナで数えて 70 台、これだけのものを送り出しております。古着ですね。送り出しております。この支援というのは今も継続しておりまして、2008 年にはパキスタンとアフガニスタンの難民キャンプのあるその地域で地震が起こりました。そういうことでその地域のパキスタンの住民にも集めた古着を分けるということを行いました。また 2010 年、2011 年にはパキスタン北部で洪水が発生して、これもアフガニスタンの古着と同時に一緒に集めてそちらの方たちにも、被災者の方にも配布するというようなことを行ってきております。

大塚マスジドの関係者のみならず、従来から救援活動なんかに携わっている非ムスリムの方たち、こういう人たちがたくさん協力してくださいまして、たくさんの古着を集め送り出す、そういうものを整理するという作業が実現できたわけですけれども、そういった協力してくれた非ムスリムの中には 2002 年に現地訪問のグループを組んだわけですけれど、

その一員としてパキスタンのアフガニスタン難民キャンプ地他へ直接出かけて、難民と接した方もおられるということでございます。

そういうところで、東日本大震災の救援活動ということに移ります。海外での大災害がありますと、日本中に呼びかけて救援物資の提供などを求めてきているわけですけれども、この度の大震災の実情を知った時には、大塚マスジドの関係者は今度は日本国内の被災者に救援の手を差し伸べなければならないという思いに駆られたわけですけども、何をどのようにやれるのか、ちょっと見当がつかないという状況でございました。ところが地震が起こって 2 時間後、大塚マスジドのクレイシー事務局長のもとにトルコのイスラーム団体から電話が入りました。パキスタンのイスラーム団体と繋がりがあるということで、そこから大塚マスジドを紹介されたということで電話をかけてきたわけですけれども、支援のために来日したいけれども何が出来るかということで、一緒にやりましょうという、そういう電話があった。こちらとしても何がどうできるのか分からない。現地に果たして行けるのか行けないのか、そういうことも分からなかったのだけども、ともかくそれでは一緒にやりましょうと、来てくれたら歓迎しますからということで電話を切ったわけでございます。それでさらに、地震の翌日であるすなわち 12 日の夕刻、また電話がありまして、トルコからの 5 人が関西空港に着きましたという連絡があったわけでございます。翌日一行と東京で会いまして、クレイシー事務局長は連絡係として東京を離れないということにしてこの一行５人が、東京にいるトルコ人の案内で被災地の方へと向かいました。その結果、仙台まで到達できたという通報を得まして、これからもし救援物資を運ぶなら、それのための確実なルート、そういうものを教えてもらったということでございます。それで今度は、大塚マスジドが用意しました車にインスタントラーメン、ビスケット、飲料水、そういうものを、救援物資を積み込み、さらにおにぎり 550 個、これを積み込んで、13 日の夜に東京を出発しました。救援物資の輸送車ということで高速道路の通行証というものを入手でき、また自動車の燃料を満タンにすることができました。この第 1 便の救援物資につきましては、避難所での配布は自衛隊が担当しているということでございましたので宮城県庁にすべてを託して参りました。ただですね、停電していてご飯が炊けないと、そうしたところにおにぎり嬉しいなということで、大変歓迎されたということです。それから第 2 便というのは、東海地方のイスラーム関係者が送ってくれた紙おむつ、ペットボトルに入ったお茶、そういうものを合わせて、当地で調達したインスタントラーメンなどを積んで 16 日に出発しております。仙台マスジドの方に半分降ろしまして、仙台マスジドを頼ってくるムスリムの方たちに利用してくださいと、もしそれでもさらに余るようならば近隣の人たちにでも配ってくださいということで、また残りの半分についてはですね…

あと 5 分。これは無理ですね。あの、もうドキドキしてできなくなっちゃったな。

それで、マスジドの案内によって残りの半分は直接避難所、仙台市宮城野区にある岡田

小学校という避難所に届けております。紙おむつとかペットボトルに入ったお茶というのは、こういうものが欲しかったと、涙を流さんばかりに喜ばれたということでございます。それから第 3 便、これは 18 日に出発しております。これは、仙台マスジドの案内に従いまして仙台市内の 3 か所の避難所に物資を届けております。それから第 4 便、第 5 便、第 6 便、第 7 便、これが 20 日から 26 日の間に出発しておるわけですけれど、この時におにぎりをそれぞれ 1036 個、1482 個、1800 個、1219 個を積み込んで、宮城県の山元町、気仙沼市、南三陸町の避難所に届けております。それから第 7 便では、訪れた避難所では届けた物資が有り余っているということで、ちょうどその避難所に余っているということで他の避難所に回ろうとしたんですけれども、車の燃料が切れるのが心配で、そちらに回って届けることができなかったというような残念なことも起こっております。それから第 8 便は 27 日に出発。これについては原発事故が理由で救援の手が手薄になっている福島県いわき市というところに敢えて向かっております。このころには避難所では何が不足しているのかということで、納豆であるとか、タオル、石鹸、胃腸薬、インスタントの味噌汁、下着、靴下というものも救援物資に加えております。第 9 便は 29 日に出発。福島県の女川町へと向かいました。こちらは道路が寸断状態で救援物資が十分には届いていないということで、避難所のほかに難を逃れて自宅に住むことができる人々、そういう人たちが物資が足りないということでそういう方たちにも物資をお渡しすることができたということでございます。それが第 10 便、これは 4 月 2 日になりますけれども、インスタントラーメン、カップラーメン、靴下などの救援物資、それに牛乳とオレンジ、イチゴを加えました。それからこの時に最後のおにぎり 2200 個を合わせてですね、気仙沼の中学校の避難所に届けております。牛乳と果物がしばらく口にしてないということで、この牛乳、オレンジ、イチゴというものは大変歓迎された。それからさらに何でおにぎりが最後なのかということになりますけれども、これにつきましては本当に温かいものが食べたいという要望があってですね、おにぎりというような冷めちゃうものではなく、もっと温かいものを何とか届けようということでそういう形になった、おにぎりはここで打ち止めということでございます。それからおにぎりをこれだけ大量に、どうしてできるのですかということですけれども、それにつきましては大塚マスジド近隣の商店街、ある寺院のお寺の方々、その他個人や団体の協力者があって初めてできたことでございます。それから第 11 便（4 月 3 日出発）～ 25 便（5 月 2 日出発）まで 15 回のうち 11 回については、いわき市の避難所の方で鍋で炊いた料理を温めることができる、そういうプロパンのガスコンロがそろったということで、炊きだしたカレーを鍋ごと持っていきまして、それから大きな保温ボックスに炊きたてのご飯を入れて、冷めないように持って行ってですね、それで供給するというようなことを始めました。

　え一、あと 1 分ということでございますけれども、5、6 分もらいますね。それでなければ皆さん満足なさらないと思います。

避難所で鍋を温めると、150 人ほどの大鍋の料理、主にカレーですけれども、これに炊きたてのご飯を持って行ったと。救援物資とともにそういうものを東京から運ぶということをやりました。第 16 便については、その前の回に子供たちが『おじちゃん、ハンバーグしばらく食べてないよ』なんて言うものですから、そういうものを敢えて用意し持っていたと、子供たちのためにね、そういうこともやっております。それから 21 便からはできるだけサラダであるとか果物というようなものをカレーにそなえるというようなことを工夫いたしました。カレーばかりではなく他の料理もございます。それから調理人の関係でカレー料理というのが主体になってしまいましたけれども、たまには牛丼であるとか、日本的な煮物であるとか、ハンバーガーといったものもだんだんメニューに加えることができました。それから牛乳を現物支給してくださる方があってですね、それはこれ以降毎回届けております。必要な物資を聞きだし、それによってまだまだ停電があるから懐中電灯、乾電池、文房具、そういったものが欲しいということで、当時は懐中電灯とか電池というものがなかなか手に入らない時期だったんですけれども、何とかかき集めてそういうものをお届けしたということもやって参りました。

それから暑い時期を迎えまして、東京で調理して運んだのでは傷んでしまうということで、そうした時にいわき市内にいわきマスジドというものがありまして、そこの調理場を使えるということが分かったわけです。従いまして 26 便（5 月 3 日）～第 89 便（7 月 9 日）まではほぼ毎日いわきマスジドで調理した料理をいわき市内の避難所に届けております。メニューにつきましては、焼きそばであるとか親子丼ぶり、煮魚、そういったものが加わっています。

それから 7 月 27 日にはいわき市内のすべての避難所が閉鎖されて、被災者は仮設住宅なりその他の住宅に独立して住むことになりました。それを前に要望に従いまして、第 90 便では、7 月 10 日になりますけれども、少数ですけれども洗濯機やこたつなどを持って行って寄贈した。第 91 便（7 月 25 日）には布団のセットを 170 組、こういうものを寄贈した。というのは、仮設住宅では家族が多ければ布団が足りないというようなことで、そういうのに応えたということでございます。ただ仮設住宅での支援をどのような形で行うのかということで、仮設住宅によっては集会場みたいなものがあるというようなことで、第 92 便・93 便・94 便・95 便・96 便・97 便、これは 12 月 27 日最後ですけれども、ここではあらかじめ用意してもらった被災者が集まれる場所、そういう場所に炊き出しを行いました。それから 12 月 22 日には広島県のミカン農家が寄せられたミカンをお持ちしております。

ここでまとめますので、あとちょっとでございます。このたびの救援活動は資金面も含めてかなり順調に実施できたと思います。アキール会長が足しげく現地に赴き、徐々に現地の状況を把握し、現地に知り合いができて、被災者の要望に沿った救援ができたということが挙げられます。また、毎回報告書が整えられました。それで報告書をもって皆さんに結果をお伝えしたということで、内外の資金提供者、関係者には写真入りのその報告書

をメールで届けたということで資金提供者には安心をいただくこともできたし、また更なる資金提供を誘発するということにもなったかと思います。それから物資の調達面では、ハラール食品の輸入の草分けであるガリーブ・フサインという方が理事におられまして、その方が走り回っていろんな物資を集めたということもありますし、それから当時入手が難しかった懐中電灯だとか、乾電池だとかそういうものをかき集めている業者をクレイシー事務局長が見つけて、そういう人の協力を得られた。それから、アキール会長がかつて取引相手であった人と偶然に出会って、良質の布団を格安で入手できるというようなことを図っていただけたというようなことで、こういうような救援が実施できたという風に思っております。それから中古自動車の輸出業者の仲間からは、物資輸送用の車両の提供もありました。それからいわきマスジドがあって、被災地の近くで調理できたというのは大変幸いでした。またいわきマスジドで料理ができたにしても材料やその他の救援物資はその都度東京から運ばなければならないわけで、いわき市というのは東京からはそれほど遠くなかったということで、後半いわきマスジドの方で料理するようになってからは毎日のごとく炊き出しができたということがあったかと思います。それからさらにアフガン難民支援以来の実績があればこそ、非ムスリムの方たちからの協力が得られたということでないかと思います。それから最新の報告書というものはまだ上がっていないんですけれども、年が明けて 1 月、2 月にも炊き出しを行っております。

以上が時系列的な、無味乾燥な報告でございますけれども、血が通った温かみのある話については後程アキール会長の方に質問いただければ、お答えあるものと思います。
時間を過ぎて申し訳ございませんでした。以上でございます。

小島：どうもありがとうございました。引き続き、戸田マスジドさんの方、よろしくお願いします。

戸田マスジド

戸田マスジド、ライース・シディッキ：ハムドリッラー、[...]

すべてのみなさん、世界に住んでいるみなさん、私たちは兄弟である。なぜなら私たちみんなアダムの子でございます。だから私たちは兄弟にならなくてはならない。すべてのイバードゥッラー、イバードゥッラーとはすべての人間はアッラーのものであり、アッラーから来ているものであり、人物であり、みんな兄弟でございます。

「戸田モスク」、「戸田マスジド」というより「マディーナ・マスジド・戸田」。戸田の名前を添えていますけれども、皆さんは「マディーナ・マスジド」より「戸田マスジド」と言われておりますが、それでもいいですけれども、でも厳密的に本当は「マディーナ・マスジド・戸田」でございます。戸田の名前も付いています。最後に付いています。

ところで、その地震の時、去年の 3 月 11 日。3 月 11 日に私は金曜日の礼拝の後に一人だけでモスクに残っていた。すべてのみなさんはもう帰ってしまった。２階のところで、もうすぐ 3 月 23 日にパキスタンで予定していたために、新聞のところで私にちょっとパキスタンへのメッセージを書いてくださいと言われていて、だから私は 2 階の部屋でそういうメッセージを書いていた。最初地震が始まって、少し揺れが始まったところ、私が持っていたペンをそのままにしてそれを待っていた。もうすぐ止まると。なぜなら日本という国は地震が多いところですから、いつも私たちは地震を受けていますから、そんなにびっくりはしなかった。でもどんどん、だんだんそれが大きくなって、それでも私は部屋の中にいてもうすぐメッセージを書き始められるだろうと思っていたんですけれども、下の方から声が上がってきたのです。すごい。それで部屋から私がちょっと見ようと思ったら、すべてが止まっていたんです。それで前の電気の線とかもゆらゆら揺れて、そのあとマディーナ・マスジド・戸田のモスクもすごいあれしていた。私はそんなところで、すぐに下に降りて、モスクの責任者たちに電話しようと思ったら、電話が繋がらない。何も繋がらない。残念ながら、ラジオも何も無かったんです、その時は。下に降りて、それでみんな騒いでたから、彼らは私が上にいたときに［*lā ʾilāha ʾillā l-Lāh*…］死んでもいいと思った。ところが、地震があろうが、津波があろうが、何があろうが、もし無くても私たちは死にますから、どっちみち。だからそういう震災にあっても、もしカルマがあれば、カルマが伝われば天国。天国とはこの世界より素晴らしいところに行かれます。行けることがありますから、それがすべての皆さんの目標だと思います。この世界から離れて天国に入るのは、私たちの目標でございます。そうしたら私は下で待っていた何分か後に、二人が車に乗ってモスクの方に、どういう状況か確かめるために来ました。それで私がちょっと車のラジオをつけてください、どういう風になっているかということで。それで見たら津波が来たと、それがニュースに入ったんです。車のラジオに。それは大変ですねと思ったところが連絡はどこにもつかないから、まぁここでなんとかそのままじっとしましょうと。モスクにいましょうと。それで私はその二人に、あなたたち地震があった時に、何をしたかと。いや、カルマだと［*lā ʾilāha ʾillā l-Lāh*…］。それをどんどん言いましたと。もう子供とも家族とも友達とも何とも全然連絡がつかないためにどうしようもありませんと。どうしようもなかったと。だから死んでも天国に入るためにはカルマはどんどんどんどん伝えなくちゃと［*lā ʾilāha ʾillā l-Lāh*…］。それでじゃあ、どうしたらいいかと。まぁ、しばらくここで待ちましょうと。それでモスク、マスジドの中で私たちは待っていた。電気もその時切られて、電気もなくて。まぁ電気がなければ当然上に上がれないから、ウドゥーも何もできない。できなかったんです。待ちましょう。その日その夜、どこにも連絡つかない。どこにも行かれない。何もできない。そのままでした。次の日私の息子と連絡しようと思ったら、どうなってるあれはと。まぁ私の家は東京ですから、ほとんどマスジドに居ますから、息子とも連絡が取れてまぁいいだろうと思っていて、次の日私はパキスタン協会の 17 年も会長でいたから、パキスタン協会に何とかしてもらわなければいけない、人々に連絡して、

誰がどこにいるか。次の日連絡が初めてできたときに、これは大変なことだから何とかしようと。パキスタンの前の会長とちょっと連絡ができて、「それでどこにいるんですか」と。「富山にいます。」「じゃあ何とかしなくちゃならない。」「いや、やってます。」「何をやってるんだ。」「人を集めて、何とか食べる物を持っていこうとしている。」富山に 7、8 名集まって、2000 人分の食べるものを用意して、炊き出し。それであっためできるように、富山方から行ってもらった。

それでまた東京の今の会長と、パキスタン協会の事務局と私が連絡を取って、お金を集めましょうと。それで何とかしなければなりません。それで 2、3 日かかって、車は高速も通れないから、許可をもらわなければ通れません。それで私は警視庁の方に連絡して何とか許可を出して下さいと。それでトラックの 4t 車を 1 台と 3 台の車を用意して、そのトラックに、またお金を集めて米を 200kg と 120 個のプラムの缶詰を買って、トイレットペーパーまたは女性の病気の時に使うナプキンとか水、子供のためにジュース、ビスケット、それを全部トラックいっぱいにしてそれで走ってたんです。ところが走ってるところ、誰もいないんです。皆さんがコーヒーを買おうとしても、どこも機械から何から、すべて何も無かったです。私たちの 4 台しか走っていないんです。それにしてもまぁ行きましょうかと。一番被害があったところはどこかと。それが Abdul Malik さんという人が石巻のところで、パキスタン人で今はマレク・関根と国籍を変えたところで、その人に連絡してどこに物を、そういう支援物資を持っていったら一番いいんだと。彼は石巻のすぐ海の前で自動車の修理をしていて、ロシアに輸出していた人なんです。二人兄弟で。

まだちょっとありますから、なるべく早く終わるようにしますけど、でもなぜならそれを皆さんの心にその話をお届けしたいと思っていますから。

ところが、我々が行きますからどこに行ったらいいですかと、石巻の近くのインターチェンジで会って、その人に案内してもらって、私は最初は自衛隊のキャンプに行ったんです。関根さんが「じゃあここにあげましょう。」と。いや、私は「いや、それはだめです。」と。「ここはいっぱいものがあります。必要なところで、本人たちに持っていきましょう。」と。「ここ渡したって、いっぱいここにもう物が集まってますから、それをもうここに渡してもそれにプラス α だけになりますから、自分でその所に行きましょう。」それで鹿妻小学校と避難所のところ 2、3 箇所に行って、分けて、みなさんに。まだ物がいっぱい残ってたから、「じゃあ、どうしたらいいですか。」「じゃあ、町に行きましょう。助けてというところの町。どこか。」それで市役所に行って、そこに人を案内してもらうために。「どこどこに人がまだ残ってます。どこどこの町のところへ、どこどこにまだ残ってます。そのところに案内してください。」それで大きなマイカーを持って、それであそこの場所に行って、「我々が東京と埼玉からこういう支援物資を持って来てますから、どうにかしてその人々を、どうぞ来て持って行ってください。」すごく子供、女性の方が多かったので、すごく喜

んだんです。「これ私、これ私」「どうぞどうぞ、なんでも持って行ってください。」と言って、全部物を流して、あそこに置いて、「じゃあ、何を持って行ってもいいよ。好きなものどうぞ選んでください。」皆さんすごい喜びました。それが本当に満足した。本当の。あぁ、これが出来て良かったと。まぁ、涙も出てたんですけど、でもそれはうれしいです。人助け出来たときはね。それでまたそのときはただ米とか缶詰だけ持って行ったから、いや、それじゃあいくらの満足にもなりませんから、次は友達の Awaz…さんというところに私が連絡して、200kg の米と 200kg の鶏肉。ボンレスの、骨なしの鶏肉をすぐ用意してくださいと言って持って行った。私たち戸田マスジドは 5、600 名の鍋を作れる鍋を持っているんだけれども、それを一緒に持っていったら向こう行ったら足りなかった。そして自衛隊の人にあれはすごい大きな鍋を持っているから、「ちょっと協力してください」と。自衛隊の人は「あなたたちの食べるものを出せば、炊き出しを出せば、私たちの食べるものがみんな食べなくなっちゃう。それはちょっと勘弁してくれ。どうしてもこれは一緒だから、あなたたちのみんなに配るものをどこかまた次の機会にして、とりあえず私たちにやらせてください。」と。それで 1300 人ずつのあれを食べました。作った、昼飯。ところが昼ごろ始まったところが、もうマグリブになって夕方になってもまだ並んでる人がどうにも、無くならないんです。まだいなくならない。まだどんどんどんどん、その並んでるのが 12 時から始まって夕方の 6 時、日暮れ。人々はまだ。すべてが全部終わったころに、一人の女性が自分の旦那さんと一緒に来て、「あぁ、もう終わったんですか。」と。「残念ながら、終わっちゃった。」その時私はすぐもう一回作りたいと、作って差し上げたいと。ところができない。

もう５分だけください。これが習慣にならないように頑張ります。

まだ３回目、私が事務長に電話して、一番最初は 10 人で、次は 11 人で、3 回目は 27 人。これは石巻だけじゃなくてね。気仙沼、多賀城、いろんなところで炊き出しをして、足りなくなっちゃいけないから、だからもうちょっとの人数で。それで 27 名を 3 つに分けて、3 か所に行ってもらった。それで皆さんの喜びが、それが私たちの目標。ところが最初の 11 人も 27 人もみんな毎回毎回行ったところが、誰も私たちのためにも食べるものが残らない。食べてなかったんです、一回も食べてない。みんな。それで私が「食べてないからどうしますか？」と。「いや、いい。まず心が嬉しいです。お腹はすいても食べる気にはならない。何か食べるものがあれば、人たちにあげたい。」と。「自分で食べなくてもいいです。」と。そのまま行って、そのまま帰ってきた。途中でコーヒーも買えない。何も買えない。でもそれでも皆さんうれしい。最後の最後まで皆うれしい。大丈夫、大丈夫、大丈夫。食べなくてもいい。それが本当です。ところが 4 回目に行ったときは、一つのグループがそこを走っているとき鹿妻小学校のところで、私たちと離れて食事を配りに行ったところが、山にアッラーの名前が書いてあるのを見たと、雲で何か書いてあるのを見たと。それですぐ

に写真を撮ったらしいです。それを持って来てビデオも作ったんですけれども、それを持って来て新宿のガンジーというレストランでまた会議をやって、こういうことがありましたと。帰ってきてから。皆さん、私たちの先輩のホセイン・カーンさんとか、アブドゥル・マスジドさんとかMatsufujiさん、みなさん私の先輩の、昔からイスラームのKaziをやっている人たちをみんな呼んで会議をやった。「ここはアッラーの名前が出てきたんだから、どうしますか。」と。「何とかしましょう。何かしましょう。」と。それで皆さん、「何かメモリアルを作りましょう。こうしましょう、ああしましょう。」という話がでた。でも私が「モスクにしましょう。マスジドにしましょう。石巻のその山のところに」と。それで私が行ってあそこに知り合いが出来たから、人々と話をしたんです。「ここにマスジドを作りたいと。」「この何もないところにマスジドを作ってどうするんですか。」「いや、今後の震災を止めたいんです。モスクがあるところに震災が 2 度と起きないためにアッラーのところ、アッラーの場所、アッラーの家を作っちゃえば、マスジドを作っちゃえば、そこに住んでいる人々が助かります。」だから今でも私は時々行ってます。そんなに行ってませんけど、なぜなら私気仙沼と石巻と仙台とあの辺でずっと行ってたから、それでそこにいるマレク関根さんという人が「もう炊き出しはいりません。避難所にはそんなに人がいません。」と。「じゃぁそれがいなければモスクにしましょう。」と。それと今石巻にマスジドを作るために何とかやってますから、皆さんになんとなくドアを押してもらいたい。

以上です。ありがとうございます。

小島：どうもありがとうございました。次は、ヒラー・マスジドさん。みなさん 5 分近く遅れているので申し訳ないですけど、MSAJの方はブレイクの後にお話しいただくということでよろしくお願いします。それではヒラー・マスジドさんお願いします。

ヒラー・マスジド

ヒラー・マスジド、前野：アッサラーム・アレイコム［…］皆さん、こんにちは［…］。

千葉県行徳のヒラー・マスジドから参りました前野直樹とジャミル・アハマドです。行徳のヒラー・マスジドはその母団体、親団体でありますイスラミック・サークル・オブ・ジャパンというところが管理するマスジドの、モスクの一つでございまして今回の被災者支援活動にあたりましては中心になって動いたのがこの行徳のヒラー・マスジドでございます。この発表では私が行徳ヒラー・マスジドを中心として行ったサークルの被災者支援活動の概要をご説明しながらその中心人物、責任者となって動きましたジャミール・アハマドが実際の情景、その時の雰囲気、気持ちなどをお伝えしたいと思います。

モットーとして私たちが動きましたのは何も私ども行徳ヒラー・マスジドのムスリムがモットーとして抱いたものというわけではございませんで、すべてのムスリムが共通に抱いて何らかの活動の指針としたはずのところでございます。神の言葉としてのものなんで

すけれども、[…クルアーン 5：32] “人ひとりの命を救うものはあたかも全人類の命を救ったに等しい”ということで少しでもできることからしたいということで、すぐこのようなですね一般の日本の方々にもアピールするような支援のお願いをし始めまして、マァッシャッラー、“敵ながらあっぱれ”と、まぁ全然敵ではない愛すべき同朋なんですけれども、ムスリムの団体の中では皆さんご存知の通りいち早く時間的にも早く動けた、質的にも、先ほどの発表を聞いていても改めて感じさせていただきましたが、被災者の要望に応えた炊き出し活動ですとかそういうものをされた大塚マスジドには遅れをとったんですけれども、とはいえ出来るところからと。イスラームでは善行、善い行いにおける競争というものが非常に勧められておりましてこれもまた、聖句を引用させていただきますと、[…クルアーン 2:148] “それにおいて、善行において競争するものは競争するがよい”という通りでございまして、できるところから私どもは動きたいということで、大塚マスジドの皆さんができたような炊き出しも、非常にきめ細やかな被災者が望むもののリクエストに答えるようなことはできず、外国色丸出しの、私どもはインド亜大陸、主にパキスタン出身の人間がメンバーの中心になってございますので、カレーとナンの炊き出しがメインではあったんですけれども、できるところからと。加えて、私は大塚マスジドの回し者ではないんですけれども、彼らの活動が素晴らしかったのはおそらく後方支援で非常に良い働きをしてくれた女性陣が私どもと比べても多々おるのがまた違いではなかったかと思います。

で、様々な支援活動をですね、物資の支援としましては全部で 68 もの品にのぼったんですが、全体的にラマダーンの後、9 月ですね、9 月に入るまでに震災直後、大塚の皆さんはすぐその週に動けたと思いますけれど私どもは 2 週目あたりからだったですね。19 日から、ですから 1 週間たってからですね、1 週間たってからだったんですけれども、それから何度も回数を重ねまして、9 月までに 54 回、4 県にわたる形で宮城県、岩手県、福島県、千葉も銚子や旭など震災の被害を受けたところがございますのでそういったところ、計 154 ヶ所に赴きまして、4 万 5 千人の方々の被災者の方々にささやかながら援助をさせていただいたということでございます。

これは最初のボランティア活動でして、3 月の 19 日、20 日、宮城県石巻の 1000 人の方々にということで、

［画像を見せながらの解説］

こちら皆さん向かって右上に写っておられるのが、手記をお読みくださった仙台の佐藤さんです。この方が宮城においては受け入れの中心となって動いてくれた方でして、非常に私どもも感謝する次第です。

ヒラー・マスジド、ジャミール・アハマド：ハムドリッラー…

本当にここに呼んでいただいてありがとうございました。ハムドリッラー、イスラミック・サークル・オブ・ジャパンは大震災の時だけでなく、パキスタンにあった地震の時も、インドネシアであった津波の時も直接に行ってきましたので、できるだけ、できる範囲で

やりましたので。こちらも、いろんな団体といろんなマスジドに協力していただいてそれをやりましたので、その中はヒラー・マスジドがメインだったんですけれども、バーブル・イスラーム・マスジド、小山栃木県と、クバー・マスジド群馬館林、イクラー・マスジド、あと水戸・茨城県にあるアブーバクル・マスジド、東京にあるアッサラーム・マスジド御徒町の。あとイスラミック・ミッショナル・オブ・ジャパンと日本にあるもう一つ別の団体にも協力していただいてそれを行った。大震災の活動をやりましたので。

初めに行ったときにはだいたい 15 人くらいいたんですけれども、行くときは最低でも 9 人くらいいたんですね。多いときは 25 人くらい行きましたので。行くときは一便がだいたい 3 日間やりましたので、多くのほうはだいたい 5 日間くらい行ってきましたので、車の数が 3 台からだいたい 7 台くらいで行ってきました。その中は一台が 4t 車、トラックはいつも支援物資を運びました。

ハムドリッラー、その中日本人たちはいろんな支援中も協力をしてもらって、ハムドリッラー、それも順調にいきましたので今も向こうからある時は連絡してそれをいろんな支援物資をまだ届けたりとか、あるようになっておりますので。

炊き出しの中は、カレーとナンですね。それを向こうに行ってから作って、温かいものをあげていたんですね。その以外にも食べ物、インスタントラーメンをだいたい 4 万人の人の分を持って行きました。それ以外おにぎりとか、食べ物の中で、それ以外はいろんな使えるもの、キッチンで使えるものとか着るものとか要るものとか全部それをいろんなもの、だいたい 68 入ったものがありましたので、それ持って行きました。

ハムドリッラー、日本だけじゃなくて外国のイギリスとアメリカ、パキスタンから来た人と一緒になんというか、物資を届けました。物資を届ける方が 1 回でいろんなところから、たとえばバーブル・イスラームからも出てきまして、ヒラー・マスジドからも出てきましたので、

前野：分かりました。ムスリムは時間にパンクチュアルですから。

ジャミール・アハマド：まぁインシャッラー、時間通りにやるようにしますので。

宮城県、福島、岩手県、千葉県、いろんなところを行ってきて、ほとんど外国の方の中で、パキスタンだけじゃなくて、インドネシア・マレーシアの人とか、アラブの人とか、日本人の方と一緒にそれを、活動をやりました。その中、向こうに行ってみたら、初めに行った時をみれば、たとえば石巻のところに行くと海から近いんですね、それから山を見ればだいたい 15m 以上の津波があったと、それを感じていたんです。いろんなものを見たんですね。すごい酷い津波がありまして、それで向こうに行くのほうが、みんな子供たちも大人たちもショックだったんですね。食べ物をもしあげていても、そんなに早く食べない。でもハムドリッラー、温かいものにいすごいありがたい気持ちになってたところもいたんですね。すごい悲しい人が多かった。うちが出来るだけそれをやりましたので、イン

シャッラー、これからもそれをやるようにしたいと思います。
　どうもありがとうございました。

前野：私が唯一行くことが出来ました岩手の盛岡のですね、とある旅館で避難しておりました被災者の方々の中に年配の女性がおられたんですけれども、その方がはじめて食べるという、全く食べ慣れないものに違いないカレーとナンというものを、本当にありがたく、嬉しく、満面の笑顔で、それこそ涙を流しながら喜んでくださいまして、私は涙もろいので申し訳ありません。ささやかながらお手伝いするこちらも非常に救われた思いがしましたけれども、このように、先ほどもあったと思いますが、現在に至るまで月に 1 回程度ではございますけれども、現地の方からこういった物資を必要としておりますといったようなリクエストが入るたびに、できるだけの支援をさせていただいている次第でございます。

ジャミール・アハマド：
　物資の中には特別に大人だけじゃなくて子供の関係、子供のおもちゃ、子供の絵本とかいろんなそれも持って行きましたので、すごく喜んでいたんですね、子供たちが。だいたい避難所に行くときは 50 人から 1200 人までいる避難所まで行きましたので、それは一回みんなでご飯を作って、それでやりました。どうもありがとうございました。

前野：どうもご清聴ありがとうございました。

小島：どうも時間を守っていただきましてありがとうございました。ただあと MSAJ の方にしていただくには時間が足りないので、もしまだ追加で講演があれば他のマスジドさんと同じように 5 分くらいお読みになってけっこうですけれども。ヒラー・マスジドさんの方。いいですか。じゃあちょっと早いですけど、休憩に入りますか。

ライース・シディッキ：あと 2、3 分しゃべってもいいですか。もしよかったら。

小島：いいですか。じゃあ確実に 2、3 分で終わっていただくなら。

ライース・シディッキ：これを持って話をします。もう一回、本当に。すみません。
　まぁその時震災の炊き出しを出す話をしていたところが、一番大事なことが人々のところに温かい食べ物を届ける、それは素晴らしいことです。でも私が一番最初に言った 3 月 11 日に友達に言ったこと、地震の時に何をしましたか。カルマ［*lā ʾilāha ʾillā l-Lāh*…］、それは、我々は、ムスリムはそのカルマを持っています。炊き出しのそれも素晴らしいことを私たちはやりましたけれども、それよりこのカルマ、この言葉［*lā ʾilāha ʾillā l-Lāh*…］、幸せの言葉、成功の言葉、私たちの Sheykh Nimatullah さんが私たちに教えたこと。これは

幸せなんだ。すべての問題がなくなります。［*lā ʾilāha ʾillā l-Lāh*…］を伝えればすべての問題がなくなります。幸せにもなります。ただその幸せの言葉と成功の言葉を皆さんに、東北の皆さんに、日本だけじゃなく世界の皆さんに届けるのは本当に炊き出しを出すよりもっと素晴らしいことだと思います。だから、私たちムスリムはそれを目標にして、皆さんのところにその言葉、幸せの言葉［*lā ʾilāha ʾillā l-Lāh*…］を届けるのが一つの義務です。それが必要であります。なぜなら食べるものは生きてる間には必要なものであります。でも死んだ後に、亡くなった後に必要なものは何かというと、その言葉です。［*lā ʾilāha ʾillā l-Lāh*…］。それが届ければ、誰かが受ければ、来世に当たっても天国に入っていける。もちろん生きている間にも助かりますし、また亡くなっても助かる。その助けを皆さんに。ムスリムしかできないから、ムスリムの人々に私がお願いしたいのは、同時に食べるものとか助けるときとか何かあるそのときは、その言葉も届けをしてください。ありがとうございました。

小島：どうもありがとうございました。これから休憩とサラートの時間です。サラートは最初に申しましたように、ちょっと部屋が間違っておりまして、男性は 801 号室、女性は 803 号室で、階段を上がっていただいてもエレベーターを使っていただいても。出て左の方にお茶が用意してありますので、そちらもご利用ください。どうもありがとうございました。

次は 15 時 15 分からまず MSAJ。Muslim Student Association of Japan from 3:15, thank you.

［休憩］

小島：では着席をお願いします。

We’re about to resume our sessions. Please have reseated. We are very glad to introduce the representatives of Muslim Student Association of Japan.

Mr.Waleed, could you come down to the […] and start talking? Yes, please.

ムスリム学生連盟（MSAJ）

ワリード：[...] First of all, I would like to thank to professor KOJIMA and all members of Institute for Asian Muslim Studies for kind invitation to talk about the role of Muslim student in Japan who supported for Fukushima earthquake victims. Actually all respective brothers talked before me they talked about the role of some mosques in hell of the victims and mainly the business men and also company workers. So today and now, I will talk about the role of Muslim student. And actually we know that the Muslim students here in Japan not rich like businessman and company worker. But we decided to do something for helping the victims in the Fukushima earthquake.

So firstly before enter to speak about our work as MSAJ, Muslim Association, I would like to introduce in two minutes what is the meaning of Muslim Students Association in Japan. The first meeting for Muslim Student Association in Japan was held in 1960 in Tokyo to discuss the main problems facing the Muslim community in Japan. And the end of this meeting, from about 50 years ago, they decided to establish of MSAJ to represent all Muslim Student Association in Japan. […] from MSAJ to work for the unity and strength in Islamic brotherhood, maintain the Islamic nationality to work for the welfare for Muslim student members to promote better understanding of Islam depend on Quran and *Sunna* and also to improve Islam and Muslim's image in front of Japanese.

Muslim Student Association actually includes about 32 local associations covered most of Japanese city. So and also I would like to talk about why Muslim Student Association decided to share in the support of the earthquake victims. Actually we decided to share because these two points of view. The first one that from Islamic point of view, in Quran […], the meaning of this verse in Quran, that Allāh encourages you as the Muslim to the justly and kindly with us for faught not against you on account of religion.

So the Islam encourages us to have a good relation with all whatever Muslim or non-Muslim. Also there is another hadith, meaning of this hadith that one whom to fulfill in need of others and help others and make effort for it will fine it their world from our God it will be better than […] all state in the mosque for ten years and the end of another source for one month. This is the first one.

Second one from humanity and association point of you, actually Muslim Student Association in Japan, they have good relation with their friends and other students or neighbor in Japan here. So we feel been our heart during this problem, so we decided to do something to support the victims.

Actually the types of support, we did many two types of support. No.1: Collection of donation and the MSAJ decided to start to convene for collection of donation. The first convene started at March 15th it means after 5 days until March 27th. This is the first convene. The second convene from May 6th until May 27th. The collected money is about 100-man yen and distributed through Fukui [?] prefecture and this cooperation with Okayama prefecture and Otsuka mosque and also Sendai mosque. And this is some photo for the some substances we bought for supporting the victims, so we bought some like materials like food and drink and napkin something like this to provide this donation for the victims.

Also from Gifu Muslim Association actually we also collected make a big convene, we collected about 66-man yen. And after that we donated this money for *Chunichi Shimbun*, and the journal covered this activity in one article.

The second types of activity of MSAJ, we established like a one Muslim student volunteer

team. This team was consisted from 8 members represented Hiroshima University, Toyama University, Gifu University and Sendai University. This volunteer team visited the affected area and stayed there for three days. We visited Sendai for two days and Ishinomaki for one day. And the main job for this team is to help the victims, to remove the destructive furniture from their houses actually. And this team also was under supervision of the Egyptian culture office and with cooperation of Tohoku University. So this is some photo taking by our team to the manifestation of destruction in Sendai and Ishinomaki. Actually this is difficult to imagine that these photos taking here in Japan. Also this is photos for the volunteer team from Muslim students' side and also from the Japanese side with some students from Tokyo University. Also after just it, the volunteer team just stretched to Sendai, we visited Sendai volunteer center to make cooperation with them and actually they helped us so much for giving us some instructions and also some special clues to make our job more easer. And this is some houses that we visited and tried to help the victims there, and also some members of our team during helping of the victims.

Also I think in the Muslim student community during taking the decision there is two opinions to deal with this situation. The first opinion says that we should have something to do for Japanese community as we are Muslim student here we taking a lot of benefit especially we take a lot of knowledge from Japanese scholars here, so we should or we must do something. This is the first opinion.

The second opinion says that whatever we collected from money, it will be still a little convened with the Japanese rich country and strong country. So whatever we collected it will be a little. But finally actually we decided to support because we tried to give like good model for Muslim, Muslim not only take from the community and Muslim take and will he have the ability to give, he will give. Muslim built, not destruct. So we take the decision and actually the main message from our activity that we tried to give like good image for Muslim, actually this is our massage. We know that our activity is that whatever we collected for money or 100money or 200money or 1000money, it's not, maybe not enough to do something in this situation, but actually it is just like simple message the Muslim community here feeling the vain for you and trying to do something for you.

So by this, and finally I ask Allāh, accept from us this activity even if a little activity, but we hope to be accepted from our god. Thank you very much.

小島： Thank you very much. Now we move on to the panel discussion, so that […]. Please come to the front and […].

We are going to put the name plate, I don't know, this is not really plate, just paper on the tables. Sorry it takes a little more time for the tables ready. 今、準備しておりますのでちょっとお待ちいただけますか。

Name plate whatever is ready, so could you come down? The first four plates for the people having presented about the support and then in the order of the list of panel discussion. 最初の、こっちの 4 人が報告の方で、こちら側のパネル・ディスカッションの順番のように並ぶということで、名札のところにお座りください。

パネル・ディスカッション

小島：それではパネル・ディスカッションに入りたいと思います。とりあえず、まだお話になってないそれぞれの代表の方に５分以内で被災者支援とか震災について思うところとかをお話しいただければと思いますが、まずはアッサラーム・マスジドのムハンマド・ユースフさんお願いします。

ユースフ：[…]

Allāh gives promise to those who believe in Allāh's Oneness and those who do good deeds. Allāh gives them promise that Allāh will give them inheritance of this Earth and He will provide them with certain security in this world and He will reward them in the Hereafter. And Allāh says in another *āya* in *Surat al-Maida.* […]

Those who believe in Allāh and the belief is not mixed with wrong doing – those are the ones who have complete safety and security in this world and Hereafter. *Alhamdulillah*, we participated and supported in some activities with other association like a ICOJ, but however I want to bring awareness to all our brothers, Muslim and all Japanese brothers. In this world, [Unclear] new disease also. Humanity, they spend lot of time and lot of money to prevent such disease and cure that disease and when such natural disaster occurs and affects the humanity and lot of human beings are buried under the despair, they are buried, but as humanity we are not thinking about the prevention. If you are thinking about prevention, we are thinking about the material prevention. If you imagine the Tsunami wave of 100 meters, just it comes to destroy us. We build 150 meter wall – we erect the wall, but even though we were not able to protect ourselves. Sometimes this - imagine – this moment the Earth can slip and fall on this building. All will be destroyed. What is the prevention?

As humanity, we have to think about our safety and security in this world. What is the prevention? Allāh is the creator of the world. When I say about Allāh, there is no God, the other claims to be God, and ever any God commanded humanity to worship me except Allāh. If you think, some Gods you will see in the human beings, here and there some stupid, they call themselves God, but they did not have […]. Imagine if we does the examination for eligibility to be God, they are not eligible to be God but when Allāh says the only one God, He is the only one who claimed to be God and he commanded all humanity to worship him.

So, we have to imagine for the God Almighty Allāh and we have to prevent ourselves from destruction. How we can prevent from the destruction is to believe in Him and worship Him as he ordered us. Everyone of us has the responsibility - as Muslim brothers and sisters we have the responsibility because Allāh has entrusted us with the trust, *amāna*. This *amāna* we have, as *Rasul Allāh SallAllāhu Alayhi Wasallam* says […] in *āya*. It has to convey one message. Even one message

if you know, convey it to others, so by conveying, Allāh will develop your knowledge more and more. We have the *amāna,* we have to deliver the message. We are here with the great responsibility. We have the great responsibility. *Alhamdulillah*, these Japanese are blessed people, very nicely behaved, nice good manners, but their lack is the knowledge. That knowledge we have to give them about the creator of – the knowledge about the creator, creator of the humanity, creator of the universe. We have to share this knowledge. We have this responsibility. By sharing this responsibility, we will be able to prevent such disasters in future. That is the only way. There is no any other way because you imagine you erect your 30 meter wall, it won't be enough to protect us. No matter how strong you build your building, it is not enough to protect us from such natural disasters that come from Allāh, the creator of the universe. We have the trust, Allāh has entrusted us with the trust that is *amāna*, we have to deliver this message to every mankind, we have to share this message to every mankind. […]

小島：Next, ハリールさん。

ハリール： […]

It is really my pleasure to present today […] very happy to this meeting to […] for me presentation and […] also that for this meeting […] *Inshā'Allāh* […]. My name is Mohammad Khaleel, Egyptian. I am the president of Tsukuba Muslim Residents Association. Today, when I came, exactly I hadn't prepared or arrangement of some main points, but I want to talk about my heart. Hope is talking to your hearts. When this crisis happened a few months ago, all people who lived in Japan have said they want to make something, want to donate to make something, to draw their smile for children and for people. So, our mosque is trying to make this mosque as a shelter for old people and also trying to make donation […] and try to give […], also try to make some meals or something.

This is our feeling towards this second country, of course we have first country, our country and now we live in Japan, so we consider this great country as the second country. We live in this country, eat from this country, drink from this country, so we must cooperate and to meet coexistence for everybody, so I hope more efforts and achieve all our goals to keep this coexistence and cooperation from all people. Thank you so much.

小島：The next…次は新居浜マスジドの浜中さんお願いします。

浜中：新居浜といっても知らない人もいるかもしれませんが、四国の新居浜です。被災地からは非常に離れたところなんですけれど、僕も災害の当日、ちょうど礼拝が終わったあとでちょうど春休みということで留学生も来ていて、[…] すごい映像が流れてきてびっく

りしたんですけど、そこで離れたところでどういうことができるかっていうことをまず考えました。

そして一番最初にやったことは、今日出席されていなかったんですが仙台モスクの佐藤さんにとりあえず、いろいろ電話が殺到するでしょうけど、とにかく早くあちらの状況を聞いて、ほかのところに情報を伝えるということが大事かなと。そしたら意外と簡単につながって、そこに書かれているような状況、モスクの状況とかモスクは使えるということで、どうなるかはわからないですがモスクが援助のためのスペースになるということがわかりました。そしてイスラームセンターに連絡して、知ってる人たちに連絡して、佐藤さんに情報や連絡が殺到しないように、それをまずやりました。すぐにイスラームセンターのほうに海外からの問い合わせがありました。イスラームセンターに対応するのに十分な職員がいなかったので、離れた場所からメールのお手伝いとか電話をやらせてもらって、特にマレーシア・インドネシアからの連絡に対応しまして。ちょっと僕は今回話す予定じゃなかったので書いてないんですが、インドネシアの赤十字から２日目ですかね、どうやればいいのかよくわからなかったので、大塚モスクのハールーンさんに相談して、「ハールーンさんお願いします」とお願いしてしまって。あとマレーシアからも留学生とか医師と中心とした団体からこれは僕個人にという形なんですけど、これもやっぱりまずビザを取ることが先決なので、これもハールーンさんに連絡して「何とかお願いします」ということで、仕事を全部大塚モスクに振ってしまったみたいな感じなんですけど、そういう形でスタートしました。

それからちょっと他のところではびっくりするかもしれませんけど、僕が連絡を受けたところでは、国内の留学生から一時避難させてくれというのが入ってきました。当然四国ですから被災地からはかなり離れていますので。それと福島の原発ですね、これがテレビで取り上げられ始めると特に「そちらのほうに一時的に避難させてほしい」と。中には移住をしたいと。それでどちらに住んでいるのか聞くと、やはり東北に住んでると。それでちょっとここにいると命の危険があるので四国に移住したいと。そういうのが何件も入ってきて、結局テレビの報道で、だんだんだんだんそうでもないということになって実際に移住した人はだれもいないのですが、若干名の学生が実際に私のほうに一時避難してきました。ちょうど春休みだったのでそれはよかったと思います。

それとあともう一つ影響があったのは、これはマレーシアなんですけど、高専に留学する人たちが当然東北にも入ってくる予定だったのが急に行けなくなって、もう一回国内の留学先の采配というような形で、四国にたくさん入ってくると。実際新居浜のほうにも、仙台の高専にいく予定だったひとが入ってくるということがありました。

もう時間的に終わりなのでまあそういうところです。離れていましたけれど、災害・避難・原発などの影響で、こちらにもいろいろなことがあったということをお話しておきます。終わります。

小島：どうもありがとうございました。次はダール・ル・アルカム・マスジドのイシュラトゥ・アリー・ハーシムさんよろしくお願いします。

ハーシム：アッサラーム・アレイコム。

My name is Ishrat Ali Hashmi. I am presently in Dar al-Arqam Mosque situated in Tokyo, Asakusa near Minami-Funabashi. This mosque's start is 1998 and it has four stories of building. On ground floor, we built a library. There are many books over there in different languages, English, mostly English, Arabic, Japanese, Korean, Urdu, Bangladeshi, all you can get from really wide range. On the second floor we have […] for ladies and third and fourth are main prayer hall. We have five times *salāt* […] we have Jumu'ah prayers over there. Weekly we have *Dars-e-Quran* on Saturday. Saturday, we have *Dars-e-Quran*. Also in Ramadan we have *salāt al-tarav*ī and many activities over here.

As a Muslim, I want to give a message here. First of all, I want to explain this, especially, for Japanese people who are here. The message of Quran, the Quran is not only for the Muslims. The Quran is for people all over the world, the Quran is for them, not only for Muslims and our Prophet, *SallAllāhu Alaihi Wasallam* is not only Prophet for Muslims, all human beings who are living in this world. So, the Muslim peace and world as we thought as a Muslim that peace comes if we follow the Quran and *Sunna* of *Rasool SallAllāhu Alaihi Wassalām*.

The second part what we did in the mosque […] with the help of ICOJ as the presidents here, ICOJ, we did in the Tsunami and this earthquake, we did work for them - a lot of work, mostly in my side we go in our mosque weekly two times, and our one team has 15 members and we visited near about 54 times in different locations. We distributed over there all as before the president explained the different things over there and also we go over there, we listen to the people and we do pray over there, but as a Muslim we also show them Muslim culture by giving the help and *salāt* time is come and in front of the Japanese people and that we give the message to the people. In Japan, thanks to the Japanese people, we are brothers to all communities. Muslim world and Japan have the great relation and we never forget them because we are living for a long time here and it is our duty to be Japanese people close towards and we are close to us as brothers. We came first to National Institute of Humanity, this program organizer and students of Waseda University and the professor who did this program. *JazakAllāhu khair*.

小島：Thank you very much. 次はバーブル・イスラーム・マスジドのハーフィズ・モハンマド・ズルフィカールさんよろしくお願いします。

ズルフィカール：*Assalamualaikum warahmatullah wabarakatuh*.

My name is Hafiz Muhammad Zulfiqar. I am coming from Tochigi-ken Oyama-shi

Masjid, Babul Islam Masjid. Babul Islam Masjid in 2005, *Alhamdulillah,* the mosque at an area of 500 […] was established in Tochigi Ken, Oyama-shi. The total project cost is ¥45 million. As in the other mosques established by ICOJ, the activities of Babul Islam mosque also include weekly *Dars-e-Quran, Dawah,* providing information on Islam, other community services beside 5 times *salāt, Salāt al-Jumu'ah, Salāt al-taravī* in the Ramadan. *JazakAllāhu khair*.

小島：どうもありがとうございました。次はクバー・マスジドのファイアーズ・アフマド・ムガルさんお願いします。

ムガル：[…] アッサラームアレイコム。私は、東京からは 100 キロくらい離れてるところで、群馬県にある館林市にあるクバーモスクの代表をしております。クバーモスクが 2004 年にできて、幅広いんですけど、だいたい 250 人が一回で礼拝できるところなんですけど、毎月近所の人たちと付き合って集会を開いたり、毎週土曜日にコーランの説明会を開いたり、あと子供たちに教えるクラスを開いたり、そういう普通のイスラーム的なアクティビティをやってるんですけど、もちろんサラート・ジュマもしてますし、ラマダンのときはムスリム・ノンムスリムみんなと一緒に集まって食事会や話し合いをしたりしてます。群馬県だと結構遠いですけど、外国人の方々、ムスリムの方々がたくさんいるので、ジュマ・サラートに 200 人ぐらい集まります。あとイードとか大きなイベントだと 400 人とか 500 人とか集まっていらっしゃいます。ちょっとだけでしたが、私がクバーモスクを代表したハーシム・イシュラト・アリー［ママ］でございます。よろしくお願いします。

小島：どうもありがとうございました。次はイクラ・マスジドのイクラム・バジュワさんよろしくお願いします。

イクラム・バジュワ：[…] My name is Ikram Bajwa. I am from Tochigi ken, Kanuma City. The name of the mosque is Iqra Mosque. It was established in 2004. The building has two stories. The first floor is for men and the second floor is for women. It is a building, about 100 people can pray at a time in the mosque. There is a 5-time prayer in the mosque, *Jumu'ah* prayer and the *iftār* and *sehar* in the Ramadan and *taravī*. We have children Quran teaching class once in a week, and every week, after *Isha*, there is a *Dars-e-Quran*.

Being representative of Iqra Mosque, at the time of earthquake and tsunami, I was just out of Japan. I was in Pakistan. I just saw at the TV and I was really shocked. Being a Muslim, I just thought that the people in Japan are in a very dangerous and very hard position. I decided to come back as early as possible. My family and my other relative members just stopped me that there is no water, there is no electricity, and this is very awkward position, why are you going back? But I did not listen to anybody and just took my earliest possible flight and came back to Japan. On the very

first day, I came back into Japan, I went to the Miyagi-ken Sendai-shi with the cooperation of ICOJ, Islamic Circle of Japan, and we stayed there the full day. We just cooked the food over there and gave to the Tsunami victims.

I saw so many people was there in the victim halls. As a Muslim, I may collect not so much money, but the people who are living alone, they go so many times with the ICOJ to help the victims. Being a Muslim, we are to help whether the people are Muslim or non-Muslim, so when somebody is in a difficult position, we are to help them as much as we can. Thank you very much.

小島：どうもありがとうございました。これからパネル・ディスカッションをどう進めるかあまりはっきり考えてなかったんですけど、まあ最初に報告された４つのマスジド団体の方にお互いに質問とか意見を言い合うとか、それから今話されたマスジドに質問とか意見を言い合うとかいうことで、それぞれ５分以内でお話ししていただけるでしょうか。まず大塚マスジドのシディキ代表。

A　シディキ：［…］みなさん今日はアジア・ムスリム研究所の招待でここへ来ることができたということにはみなさんに感謝をしております。この代表会議はこれで４回目ということなんですけれども、毎回毎回一歩ずつ進んでいることは、喜ばしいことであるということもひとつ述べておきたいと思います。大塚モスクについては、とくに震災については詳しく永井さんから説明していただいたので、そちらのほうに私は触れませんけれども、ちょっとだけ大塚モスクの活動を言うと、金曜日の礼拝そして土曜日のクラスということで男女で集まって勉強会をやること、それから特別に結婚されている女性を対象にした勉強会、それから子供の教育そして幼稚園ということがあります。特別最近になって出てきた問題は、結婚されて離婚の問題、それから家庭問題、いろいろ出てくるわけですけどもそれにも携わっております。

震災についてはちょっと述べますと、この震災はどうして起きたのかということが一つ心の中に残っているので、みなさんと一緒に考えたいのです。この宇宙すべて作ったのは神さまであるということはみなさんご存じだと思いますが、その神さまは時々、人間が思い通りにいかないときは忠告を与えてくるわけなんです。こういう震災もそれのひとつだと私は信じています。今回は日本ですごく大きい震災があったということで、今まで考えられていなかった大きさであったということはみなさんからいろいろ何回も何回もいわきとかほかの避難所の人たちのことを聞いてよくわかったことは、これは一番大変だったと。災害もすごく大きかった。それはやっぱりなぜなのかと。それは日本だけではないけれども、アメリカでも起こったし、インドネシアでも起こった。最近パキスタンでも起こりましたね。これはいくつかのところで神様が忠告を与えた。じゃあそれに対して私たちは、さっきも誰か言っていたけど、私たちは何をしてるのかと。何かやることはあるのか。まあ一つでいえば、ムスリムが一番よく知っていることは、すべての物は神様からである。

だから日本にいるムスリム、日本にあるモスクの責任としては、わかってない、わからない、知らない日本の一般的な人たちに、これが忠告であるということを信じてもらいたい。わかってほしい。説明したいということなんですね。これがすべてのモスクの責任じゃないかなと。だからひとつひとつのモスクはアッラーの家であり、そしてそのアッラーの、人類のためによく考えて、その人たちにこの非難がないようにどうすればいいか。まず第一にムスリムたちの中で、神さまにお詫びを言って許しを求めてドゥアーをすること。そして一般の日本人にそのメッセージを少しでいいから伝えてほしいと。もし私たちがそのことができれば、おそらく私たちの責任を果たしたことになると思います。どうもありがとうございました。

小島：引き続き、戸田マスジドのシディッキさん。

R シディッキ：[…] 今のはクルアーンのひとつです […]。コーランというのは預言者ムハンマドにアッラーのほうから現れた言葉です。その現れたときに、何が一番大事だったかというとアッラーの存在を信じること。すべてのみなさんがアッラーのほうから来てますから、アッラーのことを信じて、アッラーを信じて、アッラーに従うこと。だから何を信じるのか、アッラーを信じて、預言者を信じて、また審判日、次の来世を信じることであります。来世はあるかそれは預言者ムハンマドに質問がありました。イスラームを信じていない、アッラーを信じてない人もいる。あなたに質問がある。なにがある？大きな今年のイベント、そのえらいイベントに対して、それがなんですか？それが *yawm al-Qiyāma* とコーランの中で言ってますが、それがえらい震災です。何もなくなるとき、すべてが、人間がなくなって、大きな震災が起きます。すべてのビルでもなんでも山でも海でもすべてがなくなっちゃいます。すべてがなくなります。それがいつ起きるか。一番えらい震災です。それがいつ起きるかはアッラーしか知らない。でもそのために対して、必ず起きる。それはみんなわかってるわけ。ムスリムの人たちもみんな知っていますから。いろんなところで、コーランの中で、みんなわかっているわけ。だからそのわかっているのは、えらい震災です。それはいつ起きる？何年何月、いつ起きるかは誰も、アッラーしか知りません。でも、それに対していつ起きるかということは、罪が流行っているとき、アッラーの名前を誰も知らないときに、それが起きると。もしも、一人でもアッラーの名前だけでも知っている人がいれば、これは事実でありますけども、一人でもアッラーを信じている人がいれば、その震災は起きません。だから震災を止めるために何が必要かということは、アッラーに従うこと。アッラーを信じて、アッラーの言葉を信じて、アッラーに従うことが、それを止める。震災を止めるために、でございます。

私先ほども言いましたが、私、パキスタン協会の会長として、１７年会長をしていました。私が副会長のときは、会長と話をして、イスラームのことをまたはモスクをつくることを、会長と相談して、そのとき平成元年 1989 年にそういうことを始めたんです。そのと

き、我々が東京ジャーミーを作ろうとしていたんです。［…］鈴木さんを私は知っている。一緒に働きをしていて、そのときそのお金が少し［…］。その時にじゃあどんどんモスクを作りましょうと、［…］building mosque を作ったんですね。それで今、モスクがどんどんできて、60 か所にモスクまたは、4、50 か所でムサッラーができたのでございます。何のためですか？日本を守るためです。日本人を守るためです。日本を、日本という国を守るためです。どんどんどんどんあちこち、全国 60 か所で今モスクができています。それは 1986 年に、昭和 61 年に始まったことです。今、ハムドリッラー、そういうモスクができています。モスクは何のためにできているのですか？ただお祈りするために？礼拝できるために？そうではありません。すべてがキーポイント、なんのために、活動のために、アッラーのメッセージをさっきも伝えたメッセージを、［*lā ʾilāha ʾillā l-Lāh*…］人々のところに届けるためにそういうものを作ったんです。だから 1986 年、昭和 61 年に始まって、もとは、私たちの考えたことは、東京ジャーミイ、東京、代々木上原のところにモスクを作ろうとして、私たちみんながんばってたんです。そのときデミルさんも鈴木さんも私たち一緒にがんばってたんです。だけどまあそれを、残念ながら 14 年かかった。その 14 年の間にいろいろなモスクができました。一番最初に伊勢崎モスク、そのあと一ノ割モスクまたどんどんどんどんできました。そうしてどんどんどんどんできて、そんな感じなんです。伊勢崎モスクをつくって、その何年かあとにいろんなモスクができて、戸田のひとたちも声をだして、我々のモスクがほしいと、富山も新潟も大阪もいろんなところでモスクができました。もとは一緒パキスタン協会。パキスタン協会は、私がずっと考えたことは、ムスリムはパキスタン協会の人たちだけじゃないと。私たちに参加してるバグダッドの人々、マレーシアの人たち、インド、いろんな人たちです。でも名前が書面にでたのはパキスタン協会です。それで私は心が痛んだのです。心が満足できてなかった。なぜ？パキスタン協会の名前だけだと他の人たちはどうなりますか。それで 2006 年に Islamic Society of Japan というのをはじめました。私がパキスタン協会からリタイアして、次の人を会長にして、さあみなさんの Islamic Society をつくりましょうと。そういう考え方で 2006 年にその Islamic Society ができた。伊勢崎モスクも戸田モスクも他のいろんなモスクもムサッラーもすべて Islamic Society としてやっております。戸田マスジド、マディーナ・マスジド戸田は Islamic Society of Japan の一部です。これからも、モスクをさっきいったようにしたいので、我々の目標としては石巻。まず一番最初に石巻にモスクを作りたいと思います。ありがとうございます。協力してください。

小島：それでは、ヒラー・マスジドの前野さんお願いします。

前野：日本出身のムスリムとして橋渡し役的な立場から、皆さんにまずお詫び申し上げます。小島先生にお願いなんですけども、パネル・ディスカッションの司会・調整役として方向づけをしてください。さもなければ、いつパネル・ディスカッションになるんだろう

といったようなですねぇ。みなさん説教大会、法話大会を聞きに来たんじゃないと思うんです。きっとなんでも聞きましょう、なんでも学びますという心の広い方ばかりだと思うので、ありがたいかぎりなんですけど、二通りの視点からお話しさせていただきますと、みながこれまで発表したのはですね、ムスリムの立場からしては至って正論、正しいことを述べてくださいました。でも私たちは私たちだけで話をしているわけではなくて、聞き手があって話をさせていただいてるので、これではまるっきり KY なわけですね、空気が読めてない。空気が読めてないことを日本人は嫌います。でもムスリムのマインドをご理解いただくために申し添えますと、ムスリムにとっては KY 結構万歳なのです。空気なんか読めなくていい。神の言葉、クルアーンが読めればいいんです。ということで、ムスリムとしては、自分たちの責務を、メッセージを少しでも伝えたいということで、できる限りのチャンスを生かして、１分でも２分でも話す機会が与えられればそれを伝えたいという気持ちで、お話させていただいてると思うんです。ですのでその辺、どうぞご寛大な心でご理解いただけるとありがたいのですけれども、さてみなさん、どうパネル・ディスカッションにもっていきましょうかということでですね、なにか小島先生お題目をいただけると・・・

小島：まあ、ちょっとパネルの構成が、言い方難しいですけど、こちらの当初と・・・

小島：パネル・ディスカッションって基本的にこの間でやっていただくということで。そのあとに総合討論というのは、会場の方とパネルの間でやっていただくと。いまはこの前に座っている方で質問・意見なんですけど・・・

前野：あくまでもテーマは被災者支援活動なんですよね。それから外れるべきではないと。それをまず認識しましょう。

小島：まあ原因についてはなかなか、難しいので・・・

前野：ではこちらから問題提起させていただきます。今申し上げたとおりムスリム側の考えとしては、少しでもイスラームのメッセージを伝えたいという気持ちで、被災者支援活動に臨んでいるわけですね、と思います。でも私としては、それを口にすべきではないと思います。ひとたび口にしてしまったとたん、もうそれは被災者ご本人にしてみれば、「あぁ、伝教しにきたのね。布教しにきたのね」ということで、彼ら、被災者にしてみたら、「下心丸見えじゃん」というですね、私たちの誠意を誠意として受け取ってもらえないのではないかなと心配するわけです。ですからもちろん心づもりとしては、伝教・布教のため、少しでもメッセージを伝えたいという気持ちがあって当然ですし、あるはずなんですけれども、それを口にしないでやったほうが良いのではないかと思うのですが、その辺いかが

思いますでしょうか。

小島：では他の方に。MSAJ の方も含めて、どうぞ。

A・シディキ：確かに、心配している前野さんが、私たちが避難所など行った時の態度のことだと思いますけど、どうやって直面するかということですね。もちろん、私たちがそこに行って布教をするとか、イスラームの説明をするとかいうことじゃなくて、あくまでも、みなからも言われたんですけども、なぜ来たんですかというときは、私たちはイスラームだからじゃなくて、日本でいわきにムスリムの方は何名いますか？そのひとを助けにきたんですか？という質問もありました。そういうことじゃなくて、今困っている方の援助に来ました。イスラームではこういうことが教えられているから。隣近所でも困っている人がいれば、助けましょうと。その目的だけできましたと。そこはそういう布教のことは私たちのところではやってません。

前野：ありがとうございます。あ、失礼しました。司会は・・・

小島：いえいいんです（笑）今のことについてどなたかご意見はありますでしょうか。

会場から：質問ありますかね？

小島：いや、会場からはのちほど

浜中：僕としましては一番離れたところにいますので、実際に現地に赴いていないので、僕はちょっとわからないのですが・・・

？：前野先生がさっき言った通りなんですけども、私たちも何回も被災地に行っているのですけど、あの一気にイメージを聞いたことあるのですけれども、行くときは［…］とかそういうこともあったと思いますけど、みんな最初は近くに来ないんですね。もちろん顔も違いますし、みんなひげがあるし、でもだんだんだんだん「あぁ日本語しゃべってる」とかそういうことをしてるから、みんな近くにくるんですけど、私がさっき困ってる人たちが、本当は困ってるんじゃなんですけれども、仕方がないんですね。向こうで、何もないから、自分では困ってるんじゃなくて、そういうことで与えられたから、なにもできないですけども、あんまり悲しい話をすると、かわいそうとかそういう話じゃなくて、日本人はすぐに悲しいことを忘れて明るくなるんですけど、被災地にいったときも少し明るく話をするとみんなちょっと元気だして、明るい顔で近くにだんだんだんだん来たんですけど。今度ももし被災地にいくときも、ちょっとやわらかいイメージでいてほしいですけど、

いっぺんに全部伝えておきましょうではなくて、少しずつ顔から、言葉からそういうことから始まったということはあると思います。

小島：どうもありがとうございました。今のことに関連して、どなたかお話いただけますでしょうか。当初の私の意図としてはやはりムスリムの方というと、日本人社会からは支援されるというイメージがひょっとしてあるのではないかと思って、まあそれを覆すためにそういう催しをやりたかったというのがあって、みなさんがおっしゃっていることはまざにそれなんでしょう。引き続きなにか…

会場：会場からなにかないんですか？

小島：みなさん、じゃあ会場の方からなにかお聞きになりたいっていう方。半分総合討論になりますけど、ご意見があれば。あの、ご自分の名前と所属をお願いします。

小牧：高崎経済大学の小牧です。実は大塚モスクの活動を、たまたま NHK のラジオで聞きまして、それであの最近では被災地支援を地元のお寺と連携してなさっているというのを伺いまして、その時に思ったのが、宗教というのは特に創唱宗教、仏教ですとかイスラーム教ですとかキリスト教ですとか国境を越えて、そして国境を越える宗教が今度は宗教を越えて困っている人を助けるということに、とても感動しました。そういった宗教を越えた連携というのは実際にどの程度なさっていらっしゃるのかお伺いしたいと思います。よろしくお願いします。

A・シディッキ：どうもありがとう。確かに考えたのは、私たちだけではまず第一に数がないと、でやれないということがはっきりしたわけです。そうすると一番近くにいたのは、となりの教会なんですね。大塚教会の皆さん方です。そしていったなら、すごく嬉かったと。なぜならば私たちも震災のためになにかしたかったけど、なにすればいいのかわからなかったと。ありがとうございましたということで、参加してくれた。それから文京区にある、あるお寺がちょうど参加してきて、私たちもそういうことがしたいということで、ミーティングやってどうしたらいいかということをお互いに話して。そこは宗教じゃなくて、やっぱり人間を助けていくんだという、今の問題に直面してやるんだという認識があったわけですね、お互いに。ですからうまく荷物を集めることとか、配ることとか、行くこととか、一緒に食事をつくることとか、そういうこと全部、宗教を越えていたわけですね。そうするとたとえば避難所にいくと仏教の方も来てるし、キリスト教の方も来てるし、みんな同じ気持ちでやってると。それが私たちが本当に宗教を越えて人間的にやってるんだなあって感じがしましたね。だから私たちはそれを伝えたかったし、おそらくある程度は伝えられたかなぁと思いますね。

小島：どうもありがとうございました。もう総合討論に入ってますので、会場から前のパネルの方々にご質問とかご意見とかあれば、どうぞ。

佐藤：フリーのジャーナリストの佐藤と申します。私も大塚モスクの地域と連携した活動には大変興味があるんですけど、あまりアキールさんばかりに答えていただいても面白くないので、他のモスクの方々に伺いたいんですが、大塚のようにご自分のモスクの近隣と連携するような活動はされたのでしょうか。またされてなかったのでしたらば、する必要がないと考えていたのか、自分たちとしては日本人と一緒に活動したかったのだけれども、きっかけがなかったりしてできなかったのか、教えていただけないかと思います。

小島：どちらか、じゃあ前野さん答えていただけますか。

前野：では私の代わりに事情をよく知っておりますジャミルが。

ジャミル：ヒラー・マスジドのまわりでは、私たちパンフレットを配っていました。それでまあ物を結構集めてもらいまして、近所の人は一緒に行くんじゃなくて、おにぎりをつくるのとか、それを一緒にマスジドのなかに来てそれを手伝ってもらいました。ボランティアで。あとお金も結構知っている人や周りの人から集めてもらって、行徳組合の人、それを一緒に物を集めてもらってそれを全部ヒラー・マスジドにもらいました。

小島：どうもありがとうございました。また引き続き質問されますか？

佐藤：ジャミルさんに質問なんですけど、その今回協力していただいた周りの日本人の方っていうのは以前からお付き合いのあった方なのか、今回そのパンフレット作って一緒に手伝ってもらえませんかって初めて声をかけた人なのか教えてください。

ジャミル：初めてパンフレットを配っていて、向こうから何便か出たあと荷物をのせるときみんなが見ていたんですね。何をやっているんだって。近くに来るのが、まあ最初はたぶん恥ずかしいと思っていたんですけど、でも見た後、何日間か過ぎたあと、来て話になりまして、そうなったんですけど、それだけじゃなくて、知り合いもありますのでお祭りとかあるときは結構呼びますので、カレー・ストアをやっておりますので、ヒラー・マスジドから公園の中で、3 月におもち作りありますので、それも紹介しました。それもあるし、わからない人も来まして、わかってる人も来ました。

小島：どうもありがとうございました。

R・シディッキ：マディーナ・マスジド・戸田の礼拝とか参加してる［…］さん、74 歳か 5 歳の方なんですけど、被災があってすぐ連絡とれるところで、その方に、前にも日本のお寺とかに蕨のほうとか戸田のほうとかいろんなとこにいったことがございますから、その方とちょっと相談したのですよ。いまどうですかと。ちょっとお寺の方に行って話をして参加をしてもらえたらと。また外務省の方にもちょっと声をかけて、私たちはこういうことをしたいからどうですかと。お金かまたは協力かなんかしましょうということで、お金の準備とか物の準備とかしますけど、そういう話があったんですね。それでまた、マディーナ・マスジド・戸田のほうにね、いつも通ってる、農業やってる戸田でまあ小さな都市で農業やってる人がいるんですね。その人に私が話をしたんですね。いつも、ときどききてるから、またはマスジドがラマダンのときとかイードのときとか、食べる物を周りにもその野菜屋さんにももっていっているんです。だからそこに、私が話をかけたんです。私は今回は一緒にはいけないけど、この玉ねぎとか人参とかポテトとかにわとりの卵も、物は差し上げますと。私はあそこまでは行けないけど、ちょっとものを差し上げるからそれを私たちの方から何かを作ってもっていく、または向こうで作ってもいいから。そういう風に、いろんなところに協力を求めてたんですね。そういう協力でさっきアキール・シディッキ先生がいったようにね、宗教を超えて。なぜならば宗教の前は、ムスリムの前では人間ですね。だから人間と人間の繋がりを、どこに助けると、どこから協力してもらえるために、どういう風に人々から助けはあらわれることを考えて、またもらってやると。もらったから人々にやると。それは日本人だろうが何人がろうがそういうの関係なく、だれからでも協力があればそれをもらって、また人々を助けると。そういう気持ちでやってました。ありがとうございます。

小島：ありがとうございます。それではもうちょっと違った角度からの質問とかご意見とかありますでしょうか。

Abdanur Anthony Brewer, Osaka Ibaraki Mosque：[…] I just want to add another dimensions to the discussion related to the sight. The earthquake was a wonderful opportunity for the Muslims to interact with Japanese in a very positive way, that is, this has wonderful effect, because we can convey the character and the generosity of the Muslim student to Japanese people. By that, *Inshā'Allāh*, they can understand the Islam is more than just a prayer.

Now let me establish Osaka Mosque. We call it "Islam Bunka center," because we wanted to make it more than Mosque. The reason been quite a large number of congregations of students who come to Japan from many countries are without their families some had also come with their wives. They have a Mosque but they have no community. They have no arena for community activities. If other family can go back with wife and children, but where does their wife meet other Muslima? Where do your children play with other Muslim children? So I would like to suggest

people especially as […] today as representatives of Mosques that they consider. Of course, I think a lot of Japanese people who believe and understand the Karma of Islam. But they can begin to pray, where is their community? This is the big obstacle for Japanese people to become Muslim. They have their family. They have their work. What can we give them? We say, "You'll go to paradise, because you say "*lā ʾilāha ʾillā l-Lāh*."" But why do they do now? What do they do their life? And I found that this is big obstacle to Japanese brothers and sisters entering Islam and sustaining Islam.

I talk we have a question that I really just for all of you, as the representatives of the Muslim community, consider how to sustain a community, how to make a community, how to share a life together. One thing I would suggest and am establishing in Osaka is that every Saturday evening and imam Muslim teaches us Quran, gives us the lecture, we study Quran with children and we have three children classes and we also have a kind of open house, many other community, Japanese people around come and have dinner with us. It happens every week. Any we can community around come and enjoy interaction with us and have next week meal too, so that is other attraction. This case is the […] *fattāwa*, an community. So what I suggest is I'd like everybody to stand up. Islam is more than a prayer. It's a community that shares life with each other, love each other, support each other. We need to establish totally community interacts socially, but also community interacts economically. We need provide work for young Muslims for students who graduate university as Muslims. I found it difficult to corporate as Muslims in Japanese society. All these things will make another major start, *Inshā'Allāh*, towards the integration of Muslims and Japanese people.

I'm sorry to talk too long time. I talked to my heart. This is important to be said […].

小島：ありがとうございました。日本に本当にイスラームコミュニティがあるかというのは、ちょっと重大な質問ですが、まあそれは場所によっておそらく学生中心のところとそうじゃないところが違うんだと思いますが、答えたい方何人かいらっしゃるようなので、大塚マスジドさん。

A. シディキ：私は、この辺について答えるんじゃなくて、自分が質問があるんですけど、大塚モスクで私たちがもう 12 年になりますけども、初めから土曜日の食事会というのをやってるんですよ。心は日本人のためにオープンしようということやってるんですけども、招待もするんですけど、あまり来ないですね。ですから今大塚モスクでこれがどうやってやってるのか、本当に近所の人たちが引っ張るコツがあるのかそれを習いたいですね。

小島：何人か答えを聞いてからまた答えていただきたいですけども。

ユースフ：[…]

The Islam is – is a huge family. It's not a religion like any other religion just a prayer, no. It's a comprehensive way of life. From – you get up from your sleep until you go back to bed. From your birth to death it's a comprehensive way of life and a huge family. When you are thinking about Islam, all world are one family. Allāh also says […], all Muslims are brothers, one family and *Rasulullah SallAllāhu Alayhi Wasallam* says in hadith, if any Muslim affects, we should feel the pain of him, like your body, one organ like your hand feels pain then all body like your leg, runs towards the doctor and you feel to get medicine, your hand, other hand gets medicine. So, Islam is one family. Any brother affects we have to help. Even within the word Islam you see Allāh gave us a great opportunity. Now we see how many nationalities and we pray together in one masjid, one prayer now, and we understand the prayer *Allāhu Akbar, Alhamdulillah,* everyone understands. If I go anywhere in the world, I can pray with any Muslim, even any Japanese, they come to our masjid, any nationalities, any time in our Hasana Masjid. Any – every week we have more than 20 or 30 nationalities, sometimes 45 nationalities on at once, so we have great opportunity. This is not found any – in any other religion because the religion – this religion is creator – the religion of the creator.

In […] in Islam, the only accepted religion by the creator is Islam. Because of this Allāh provided the unique opportunity to be a huge family, all around the world our huge family, so Allāh has given us some opportunity to share this Islamic way of life with Japanese brothers by the tsunami as Allāh says in another *āya* […]. We do not send any signs, any *āya* except as a warning. This is as a warning. If you do not act as Muslims we have to share the – what we have. As before I said, […] even if – if you know one *āya*, just share with them. If you do not share, this is […], this is a warning for you, […], not only warning it is a fear. Just Allāh benefits you just act upon what you have heard your knowledge, you have to – knowledge without sharing no use of it. *Shaitan* is the biggest *aalim* in this world, but what – what he is if he is not acting on the knowledge. So, even though you have knowledge, you have to share it with the brothers, the Japanese brothers. It is a great opportunity to share the knowledge, share about the creator – the Allāh, *Subhanahu wa ta'ala*.

We have also a weekly program and we have open center – our community center is open from 10 to 7 every day. So many Japanese they are distressed, they are stressed they come even non-Muslim brothers or Japanese brothers they come and have a consultation with us. They have family problem they come to us and consult with us. We provide the consultation how to solve – it is free – free consultation. Sometimes they are impressed – they come to enter into Islam. They bring family. Yesterday some brothers they embraced Islam 2 weeks ago. They brought their wife yesterday, *Alhamdulillah*, we have to provide such opportunities service – free service just to consult them because so many suicides happening in – in this Japan comparing to any other country, why? Because they are stressful, they do not have community. We have to provide them community. We have to provide them the social benefits because when such – some person feels distressed or something why he commits the suicide he has no consultation. Because he – he does not know about

Allāh if he knows – you know when you have someone to look after you, someone is caring after you then you will not have stress, you will not have lost the hope. Because behind you Allāh who is the creator, he will – he is behind you, you have to provide this information who are just going to suicide themselves. They are – they are just going to destroy themselves just to provide this information behind you Allāh who has created you. He is going to solve your problem. There is no problem that – that cannot be solved in this world. You can solve all problems, but with the help of Allāh who created you. You have to provide this information to save so many lives. So many suicides happening in this Japan. Also, so many divorce. People just marry and after 1 month or 2 months they are divorced. Social life is so devastated so we have to provide such consultations to the – for the people who are distressed. They do not have a family life we have to provide them. By providing such, *Inshā'Allāh*, we can develop the *dawah*. We can care Japanese people. We can save the lives – so many lives we can save from suicides, from devastation – family devastation we can save them. This is our moral and ethical responsibility of every Muslim. Sorry for taking much of time. *Wa akhiru da'wana ani-lhamdulillahi rabbil-alameen*.

小島：では次、まだしゃべってないワリード［ママ］さん。

ファディー・アルナジャル：アッサラームアレイコム。

I'm Fady al-Najar, and from Palestine, and I'm representative of the MSAJ as the capitally social fellow, MSAJ, Muslim Association in Japan. Actually I'd liked to talk to brother from Osaka that Muslim student should built community that represent Muslims to non-Muslim. MSAJ is actually between this, and we know that the different Muslim community of students between each university in Japan. And MSAJ came to build a community for these communities, so we are actually elected from these communities to just build the communication between these small communities of Muslims in different university. And our job is just to help in building which this community and with this sharing information. And I hope that Masjids in Japan can do such can things, so they built the community that is represent of them, so they can sharing for information between them to help each other and build the big community for this small communities that can be the interface between Muslims and non-Muslims. Thank you very much.

小島：ありがとうございました。では浜中さんが先ほどから手を挙げてくださっているので先に。そのあとに前野さんで。

浜中：今回の支援活動で話をさせていただきますけども、今回の支援活動、仙台マスジドといわきマスジドの果たした役割がすごく大きいのではないかと私は思いまして、もしこれが 10 年前にこの地震が起きていたらどうなっていただろうと思うのです。10 年前ですと

ほとんどのマスジドがなかったころですね。やっと大塚マスジドができたくらいです。支援に出かけようにも、そのステーションになるところがないし、今の状態だと各マスジドがあってそのマスジドの中心に学生とか地域の人たちがいて、ひと声かければみんな集まってきて手伝ってくれる、という状況に今はなってきてると思いますね。マスジドのネットワークというものが実現させてくれたんじゃないかなと思いますね。それと、そういう状況ではあるんですけど、もうちょっとよく言えば、もっともっとネットワークがよければ協力して、ほとんど援助に行ったのは僕の知る限りでは関東のマスジドと名古屋あたりのマスジドが実際に支援にいってるんですけど、そのあたりが一緒にもっと協力してやれればもっといい形ができたのではないかなぁと思うし、僕もイスラームセンターで電話を受けてて、すごい数の援助をしたいという声をいただきまして、ちゃんとそれに対応できたのかなと思いまして、もっともっと僕らがうまくやればもっといい援助ができたのではないかなぁと。海外の人はすごく多いけれど、受け入れ側の日本サイドがあまりにも力がなかったのかなというのを思いますけれども、はたしてきっちりと外国から来た声に、まぁほとんど大塚マスジドに振ってしまいましたけど、ちゃんとできたのかなって思いますけど。あとは他のマスジドの方にこんなことしたらよかったかなというようなことが入ってきたのかどうか。そういうことも知りたいと思います。

小島：ではそういったことも含めて前野さんの方から。

前野：すみません、今の浜中先生のご質問にはお答えできそうにないんですけれども。
Just I want to repeat “thank you” […]. We, Muslims from Japan […].

先に、話を戻させてしまうようで恐縮なのですけれども、コミュニティをって話ですが、一つ二つですね、一つは行徳での活動の紹介と、一つは昨年５月末にこの被災者支援活動にちなんで、Islamic Circle of Japan が協賛を受けていましたアメリカの ICNA: Islam Circle of North America という団体の Helping Hand という分野の、世界各地の被災者支援活動に携わっている団体から招待を受けまして、向こうの年度総会みたいな大きなコンベンションに招待されたときの話なんですけども、その前に一つ行徳ではすこしでも門戸を開きたいと、一般の人と関わりたいと、まあそのためには日本出身のムスリムが独り立ちできないと話にならないということでですね、次代を担う子供たちには週末学校というのをやってみたり、加えてイブニングスクールということで、夕刻の時間に学校をやっていたり、月に一度イスラーム研修会ということで、合宿ですね、一泊二日の、土曜の昼から翌日の朝まで一緒に授業・講義があったりお茶会あったり、一緒にサッカーしたりとか、ここにいらしてくださっている何人かも、訪れてくださった方もいらっしゃるんですけど、というようなささやかな試みをしております。

アメリカの話ですが、コミュニティ云々の話で大事だなとおもうのは、言葉です。言葉の問題といいますか、日本の人がイスラームを受け入れて、独り立ちといいますか、本当

に自分もまた活動に積極的に関わっていく上で大事なこと、かつ場合によっては壁になってしまうことというのは、往々にして言葉だと思うんですね。マスジドに行ってみましたでも講義は外国語、イマームさんに、指導者の方に相談しに来ましたでも日本語わからない・・・何も他意はないのですけれども、そういった現実があるので、参考になればという思いで紹介したのはアメリカの ICNA のケースです。ICNA は 1960 年くらいに設立された団体のようなんですが、70 年代にはもう自分たちの団体の正式言語として英語と定めたようなんですね。私どものサークルや大塚やほかのみなさんも、基本的に日本で積極的に活動している人たちのほとんどは、インド亜大陸出身のウルドゥー語を母語とする人たちが多いと思うんですけども、彼らもまた然り、ICNA という団体もインド亜大陸出身の人が多いんです。ですけれども 70 年代中盤、後半には英語を公式用語として自分たちの会議でも一切母国語は使わない、英語のみということを定めて、それが故にしっかりとアメリカの社会で根を張って、それこそ本当の意味でインターナショナルな活動を展開するようになったということで、私どもの今後の課題として、日本語というのを申し添えたいと思います。ありがとうございました。

小島：どうもありがとうございました。大塚モスクさんの方で今の回答にたいして何かコメントとかありますか。あ、まだありました？じゃあ。

永井：先ほどですね、大塚マスジドのアキール会長から日本人を食事に招待してもなかなか来ないというお話があったのですが、今回の救援活動の炊き出しにヒントがあります。それはなにかっていいますと、みなさんカレーライス持ってってどうやって日本人に差し上げましたか？一人に一つ分を持って差し上げませんでしたか？そうですね？あなたの国ではアラブの国では大きなお盆の上にご飯がいっぱいのっていて、羊があって、それを一緒になって直接食べるというのが素晴らしい料理だとされています。日本では例えそうなっていても、銘々皿という言葉をご存じですか？銘々というのは一人ひとりという意味です。一人ひとり自分が食べる皿というのを用意しておいて、そこにまず取ってそこから食べるというのが日本の習慣なんです。ですからみなさん方がマスジドでお盆の上にご飯を盛って 3 人くらいが一緒になってスプーン突っ込んだり、手をこうやったりして食べるのを見ただけで、初めての日本人はびっくりしますよ。ですからそういう習慣もね、一緒に身につければいいじゃないかってことではないでしょう。ですからまずはね、食事に招待するならば、一人ずつのお皿を用意するのはまず日本では大事なことだと思います。また今回みなさんそうされたじゃないですか。

小島：どうもありがとうございました。

ジャミル：質問なんですけど、ここにいるイスラーム教の人じゃなくて日本人の方、イス

ラーム教に入ってない方に一つ質問がありまして、同じように今おっしゃった、ヒラー・マスジドはみんなに別々に分けてご飯をあげてるんですけど、でも年に2、3回くらい、近所の人をインド料理に招待するんですね。でまぁ結構集まるんですけど、でも質問が、日本人と外国の方は、もし私が外国の方と会うときはすぐに慣れちゃうんですね。すぐに友達になります。日本人と会うときはすぐにそうはならないですね。外国の方は握手して、お名前なんですか、どこにすんでるんですかって、お互いに電話番号もEメールや住所もお互いにもらうようになるんですけど、日本人の場合はreservationが結構ありますので、そのreservationがどうやって、超えることができるんですか。日本人の方から質問なんですね。同じように、震災のときもまぁ何回行ってきたんですけど、でももう何万人も炊き出しとか物資を届けましたんですけど、でもその中から、何万人の中で何人くらいいるんですけど、今までコンタクト取られてるんですけど、１％もないですね。その何万人の中で。どうやってそれは超えることできるになりますかね。それが質問なんですけどね。お願いします。

前野：通訳します。

小島：どうもありがとうございます。

前野：日本のみなさんに質問させてください。みなさんが、見かけ外国出身の人から何かいいことをしてもらったときに、アプローチされたときに、近づいてこられたときに、自分もまた近づきたいと個人的に繋がりを持ちたいと思えるようになるその一線とはなんでしょうか。どうしたら個人的に近づいてもらえるでしょうか。

ジャミル：宗教関係なく。

前野：ええ。よろしいですか？訳として大丈夫ですか？

小島：どなたかお願いします。お答えいただける方いらっしゃいますか？

R・シディッキ：まず、永井先生の質問の、一緒に食べてもお皿は別々。私たちは一回行ったところで千人以上を炊き出しするのに、前もってお皿を用意して一人ずつに出しています。また伊勢崎モスクもそう、マスジドもそう。マディーナ・マスジド・戸田もね、皿は別々なんです。一緒に食べるあれはもちろんイスラームの習慣ですけど、そうはしてないですね。一人ひとり別々です。そしてまたジャミルさんの答えには、私の人生の中で、60歳になって病院に入ったのはね、一回だけです。去年の９月に一週間だけです。私が初めて病院に入った、ずっと病院の中で生活をしなきゃならない、それまでにはそういう経験

はなかったんです。どうしようか。夜から朝までずっと。だから友達になるに、「どうですか？元気ですか？どうなんですか？」こういう風に話をしていると、また向こうから。名前とか住所とか名刺交換といいますかね、やらなくてもいいんですね。やらなくてもいいんです。ただ「こんにちは」とか「こんばんは」とか言って、「どうですか？どういう状態ですか？」「どういうこと今してますか？病気はどうですか？誰か来ました？」そういう風にあれをすると、結構日本人は近づいてきます。初めから「あなたの名前はなんですか」「住所はどこですか」「あなたの電話番号教えてください」といわれてもなかなか教えてくれないんです。なかなかそういう（ことは）初めから出さないですね。向こうは、私はあなたのためですと、結構友達になってくれる。そういう風にやれば。しかし向こうからね、私はこうです、私の名前はこうですと。私はときどき電車でね、普通は車で帰ってるけど、ときどき電車で走る機会があらわれるときに、結構「こんにちは」とかいいますね。それはどこから来たのかというと［…］、誰にしても、話し自分のほうからしてくるんですね。そうすれば、「元気ですか？」「お元気ですか？」「どうですか？」「どうしてますか？」そういう風に始まると、日本人は結構、だから Abdulla［…］さん、初めはそういう風に会いましたね。そこから今２３、４年ね、佐久間さん杉村さん家族・・・私いっぱい友達いる。日本人のね。一般の人でも、仕事の関係でも、みんな結構いる。何千というより何万もいます。そんないっぱい日本人の友達。そしてときどき会って話します。そういう風にね、日本人とゆっくり。Slow and steady wins the race って英語でことわざがありますけどね。細く長く、細長く。まず私たちムスリムは日本に来て、日本の習慣とかほんとの日本語ね、私もそんなたいしたものじゃないけども、日本語と日本の習慣と、よく勉強してないんですね。ときどき私、他の宗教で、それはキリスト教とかユダヤ教とかイスラーム教とかみんなね、会議がときどきありますね。そこに私が行くと、日本あの日本語ね、

小島：すみません。マグリブの時間があるのでそろそろ終えないと…

R・シディッキ：もうもうすぐ終わります。ところがね、私キリスト教の人をね、日本語を聞くと、ああ素晴らしいなと、よく覚えましたなと、よく研究しましたなと。残念ながらね、ムスリムの方はね、外国人ムスリムはそういうのを勉強してない……

小島：すみません、もう５時になりましたので、申し訳ありません。司会の不手際でもう５時になってしまいまして…

会場：もう一人聞きたいって…

小島：じゃあ日本人から誰か。短い時間ですみません。
R・シディッキ：私も 40 年日本に住んでますから日本人ですよ。生まれはパキスタンだけ

ど、日本人。

小島：あ、どうぞ。

小牧：たぶん、日本人は１回目よりも２回目偶然に会うということに縁を感じるので、１回目は偶然会った、しかし２回目は必然だと思うので、２回目会ったときこそがチャンスだと思います。

R・シディッキ：ああ、ありがとうございます。

小島：どうもありがとうございます。

R・シディッキ：いいこと勉強になりました。

小島：本当は大塚マスジドさんにも何か回答いただきたいんですけど、時間になってしまって申し訳ありません。今日も、最後の方でマスジド間の連携とか、そういう話もちらっと出たんですが、まあ、あの・・・え？もう一人います？じゃあ、すいません。

小村：すみません、私、上智大学アジア文化研究所所属の研究員をしてます小村と申します。実を申しますと、私今回の被災者支援活動でさまざまな非ムスリムの NGO 団体とか、もしくはパキスタン人とかバングラデシュ人の個人で支援されている方の話を聞くことができました。それでやはり共感を覚えるというんですかね、その一言に尽きると思いました。というのは、バングラデシュ人の事例を申し上げますと、これは本当に個人でやっている方です。ですけど、他の NGO 団体に情報交換を求めたりとか、一緒になって石巻とか仙台に支援活動にいくと。それは本当にムスリムの方は全くいませんし、イスラームのことも全く知らない人たちなんですね。ですけど一緒に活動していく中でイスラームを知ったりとかしてイスラームに共感を覚える人たちもいます。あとは、地元の市町村の活動にも、個人として支援している。パキスタン人の個人としてやってる方の支援のすごいなと思うところは、夏ちょうど 7 月に盆踊り大会を、地元の人たちが絆を深めたいと、離れ離れで生活しているんですけど、絆を深めたいということで盆踊り大会を、盆踊り大会というのはムスリムの人たちにとっては非常にハラームなこと、それに携わるというのはハラームなことかもしれませんけれども、それに積極的に支援を、協力をして、盆踊り大会を成功させたっていうことがあるんですね。それに共感したイスラームという強い宗教を持っているからこういう風な活動ができるんだっていう話をきいたことがあるんですね。ちょっと話が長くなってしまったんですけど、これをある意味きっかけとして今後の支援に役立てていただければと思います。

小島：ありがとうございます。司会の不手際で終わりが遅れて、店田先生にはやや短めに最後の挨拶をしていただければと思います。これまでマスジド間の連携なんかを考えてこれを開催されてきた店田先生、お願いします。

店田：多民族多世代研究所をやっております店田と申します。第１回から第３回はこれまでムスリム・コミュニティの成熟、あるいは子供の教育の問題、あるいはお墓の問題、あるいは日本人とムスリム・コミュニティとの関係であるとか、そういったいわばムスリムの方の抱える課題というのを中心にしてやってきましたが、今回はこのように東日本大震災と被災者支援活動というこれまでとは全く異なるテーマで開催をさせていただきました。実のところ、小島先生におんぶにだっこで開催させていただいたわけですが。ただ、今回いろいろお話を聞いていただいた中からも感じられるように、支援活動を通して見えてきたことは、やはりムスリム・コミュニティの抱える課題といろんな面で関わっているんだなと。一つは、パネリストの方からも出ましたけれど、マスジド・ネットワークというものがどうなっているのか、どのように機能しているのかというのがこういった活動にとっても重要であったということもありましたし、それからもう一つは特に今、最後の方でいろいろお話になった日本人とムスリムとの間の関係といいますか、ムスリムと日本の地域社会との関係、こういったことも被災者支援活動の中から見えてきたことの一つだろうと思います。今回の被災者支援活動というのは、信仰の問題も先ほどいろいろ議論になってましたけれども、信仰あるいは国籍に関係なく、あるいは日本人・外国人、そういったことに関わりなく、あるいはキリスト教徒であろうがユダヤ教徒であろうが、あるいは仏教徒であろうが、多くのひとが同じような志あるいは考えをもって、震災にあわれた方々の支援活動に参加したということが、我々にも十分見えているわけです。その中の一翼を担ったのが、今日ここにお集まりになったムスリムの方々であったというのもまた事実でありまして、それについては多くの方々が非常に感謝しているという風に私も考えます。ただこういった被災者支援活動が、信仰とか国籍に関係なく、日本だけでなくあるいは海外でもたくさんの震災・災害があるわけですが、そういったところでも日本人があるいは外国人が活動して、互いに助け合っている。そういった、相互に助け合うというのは、宗教・国籍に関係なくなされるというのが理想の社会の姿でしょうし、ある意味でそれがイスラームの教えの中にももちろんあるんだろうと思います。そういったことを考えていけば、日本におけるムスリム・コミュニティの今後というのもいろいろ考える良いきっかけになったのかなという風に思います。今回非常に多くのマスジドの代表者の方が参加していただきまして、ありがとうございました。それから会場の方にはその他のムスリムの方、それから一般の参加者の方々、例年通り多くの方に参加していただいて、第４回の代表者会議も成功裏に終わったという風に思います。今後は第５回というのもたぶんやることになりそうなので、来年またお会いできると思います。ただ第５回の代表者会議ではたぶんま

た原点にもどってムスリム・コミュニティということを改めて考える、今日のパネルの中の議論でもいろいろ出てきたわけですけど、ムスリム・コミュニティの成熟あるいは日本人の地域社会との関係、そういった抱えている課題を改めて考えるということをまたテーマに取り上げてもいいのかなと思います。こういった 3.11 を経てムスリム・コミュニティ自体が変わってきたということもあると思います。あるいはネットワークがより強固なものになるようなきっかけにムスリム・コミュニティにとってはなったのかもしれませんし、そういったことについて改めて考えて、ムスリムのみなさんが抱えている課題と、我々日本人・日本社会がムスリム・コミュニティのみなさんとどのように関わっていくのか、そういうことを改めて考える機会に次回はまたなるのではないかという風に、私は感じました。いろいろ十分にまとめられないところも、議論の中でいろいろ面白い論点もありました。こういった会をまた来年もぜひやっていきたいと思いますので、またみなさんのご協力をお願いして、また来年お会いできることを願っております。インシャッラー。ありがとうございます。

小島：司会の不手際でぎりぎりになってしまいまして申し訳ありません。これで一応お開きということにさせていただきたいと思います。ご来場のみなさま、もちろんマスジド代表者等の方々にも厚く御礼申し上げます。学生会議も、ムスリム学生代表者会議というのもできればやりたいと思いますので、お帰りになってからでも結構ですので、アンケートにご回答いただければ助かります。どうもありがとうございました。

配布資料

仙台モスク（一般社団法人 ICCS）代表　佐藤登氏の手記[3]

あの日は金曜礼拝の日でした。私はマスジドに誰もいなくなったので、後片付けやタオルの洗濯をしてから、マイカーの給油のため国道 48 号線を走行中、あの大地震に遭遇しました。揺れが収まってから、直ぐにマスジドへ引き返し、被害の状況をチェックしました。本棚や食器棚などなど、転倒や若干の破損はありましたが、津波の被災地に比べたら、極軽微なものでした。

11 日の夜、何人かのインドネシアの男女留学生らはアパートなどへ帰るのが怖いと言ってマスジドへ泊まりました。さらに、建物内は怖いと言って敷地内に駐車した車で一夜を過ごした者も居りました（たまたま来仙していたモルディブのムスリム）。

12 日この日、昨日の地震による地割れから、敷地内を走っている水道の配管３ヶ所から漏水が見られ、応急修理やマスジド内外の後片付けをして過ごしました。夕刻には仙台に居るインドネシアからの留学生とその家族全員が東北大学の留学生会館に緊急招集され、来仙した大使館員の説明の後、チャーターして来たバスなどに分乗して東京へ行ってしまいました（彼らは２日後に帰国したはずです）。他の国の留学生らも数日のうちに、帰国したり、或いは、先ず山形を経由して日本海側を南下し、東京やさらには大阪方面へと避難して行きました。当仙台マスジドを支える会員（20 数カ国のムスリム 250 から 300 名中）の 80 から 85%位は東北大学の学部及び大学院の留学生ですが、彼らの大半があっという間に居なくなり、帰国できない事情の国の学生らが残った形になりました。（尚、これは、12 月のある会議で知ったのですが、（１）東北大学の数多くの建物のうち、あの地震で相当の被害を受けたものもあり、一棟一棟安全確認をする必要があったり、実験設備、機器、資材などの補修、補充が完了するまでに相当時間がかかると予想され、従って講義再開も大幅に遅れることと（２）多くの避難民を抱えた各避難所に留学生らの外国人が大勢加われば、言葉の問題や風俗習慣の違いから避難民とのトラブル発生の可能性などを考慮して、大学が教授らを通じ、出来るなら一時帰国するよう勧めたようです。）

このような状況の下、仙台マスジドには私（佐藤）とイギリス人のムスリムの２人がおよそ２ヶ月半に亘って泊り込みをすることになったのでした。（もう一人のパキスタンのムスリムは自宅とマスジドを往復しながら約１カ月位いて、その後帰国しました。）パキスタン大使館からは１４日頃から大使専用車に米、ジュース、食用油等を積載しマスジドへやって来まして、それらを被災したパキスタンの方々や市民の方へ配布するよう要請して行きました。（３度目には大使自身も来仙し、お見舞いと激励をしていかれました。）相次い

[3] 佐藤氏には、当初、現地仙台の状況についてご報告いただく予定であったが、残念ながらご出席がかなわず、代わりに手記を送付いただき、会場で配布した。さらに、本報告書への掲載にも快くご同意いただいた。記して感謝の意を表する次第である。

で、関東方面から、トルコ、マレーシア、インドネシアなどの救援チームが来仙し、それぞれの同胞（日本人との国際結婚などで自宅にとどまっていた）へ救援物資の配布をして行きました。残った物資はマスジドへ配布を託していきました。

実は、当マスジドにはテレビなどは置いてありませんので、被災地の状況を得るのはラジオからだけでした。しかも、時々断片的に聞くだけでしたが、利用できそうな情報は、メモしておいて、どの被災地で何を欲しているかを知って、物資の配布に活用しました。とにかく、皆様のほうがテレビなどで津波の押し寄せるシーンや被災地の状況、被災地で緊急に必要としている物品等はよくご存知だったかもしれません。

大規模な救援活動を開始なさったのは大塚マスジドさんが最初でして（私が知るのは宮城県内のことだけですが）、救援物資を車に満載して来られ、道案内を依頼された時、私は、兎に角、沿岸部はどこも軒並み被災しているので、宮城県南部の山元町から案内を始め、北は気仙沼市に至る各市町村を順次案内することにしました。以後毎週毎週何便もの満載した救援物資を各地へ送り届けたのでした。（詳細は当該マスジドさんからご報告があると思いますので、私からは、救援物資の選定、物資購入の資金や救援物資の買い付け調達、車や運転する者の動員などなど関わった大勢のムスリム、ムスリマの方々の献身的ご努力に被災地に住む者の一員として感謝と敬意を表したいと思います。）

震災直後からしばらくの間、被災地に行ける車両は緊急車両（自衛隊や警察等々）か予め緊急車両の許可を得た救援物資輸送車だけで一般車は不可。しかも、現地へ行ける道路は各地で寸断されていたため、被害が比較的軽微だった（それでも、あちらこちらに亀裂や段差がありました）東北自動車道路や三陸自動車道路が使われました。各市町村へのアクセス道路は主要道路を自衛隊が瓦礫を撤去してひらいたもので、場所によっては大幅に迂回したり、従来は地元民だけ使用していた道路を拡張したり、自衛隊の工兵隊による渡河橋だったりと色々でした。

3 月末から 5 月中旬頃までに、全国各地のイスラーム諸団体から様々な救援物資が続々送られてきまして、私たち（最初は３人、後に２人）は大塚マスジドさんが来られない日に、手分けして各地沿岸地域へ救援物資の搬送、配布を行いました。水や食べ物関係の物資はどこでも歓迎されましたが、時の経過とともに、各被災地の救援物資受け入れ倉庫が満杯になってくると、衣料品など、特に、古着類は受取拒否にあうこともありました。４月上旬には突然、マレーシアの救援支援団体から１０トン車と５，６トン車の２台に満載した物資が送られてまいりましたが、当マスジドの敷地内へトラックが入れないため、地主（地元では有名な暴力団）に無断だったのですが、プラスチックシートを隣接地に敷き、その上に野積みし、上にもシートをかけ保管しました。これらの物資でも、ラーメンなどを含む食料品関係物資はどこでも大歓迎されましたが、シーツや南国向けの薄い毛布類は夏ごろまで保管し、配布しました。（兎に角、早急に配布することに必死でした、トラブルを起こしたくはありませんでしたし、雨などで折角の物資を無駄にしたくはありませんでしたから。半分ぐらい配布後残りは、マスジド内に保管しました。）

大塚マスジドさんが福島県など他県へ救援物資の配布活動を移された頃から、ヒラー・マスジドの皆さんが救援物資と炊き出し活動のため見えるようになり、被災各地への道案内を依頼され、ここでも、私が仙台から現地まで同乗したり、運転したりして案内することになりました。ヒラー・マスジドさんの場合、炊き出し活動の場所で救援物資の配布も行う活動でしたので、毎回７，８人から１０人以上の方が数台の車やトラックに分乗して来られたので、一時休憩所の当仙台マスジドでは大塚マスジドさんの時もそうでしたが、皆さんコタツの周りに雑魚寝していただいて休んでいただきました。この時は石巻から南三陸町そして気仙沼市方面の避難所への案内が多かったです。私が関わった彼らとの最終回は岩手県の陸前高田市の仮設住宅地での活動でした。

ここで、炊き出しに関連したお話を若干纏めます。パキスタンのムスリムの方々は震災直後から被災地各地で救援活動をなさっておりましたが、とりわけ、１７年前の神戸大震災時でも炊き出しの経験がある方々が今度は石巻で毎日カレーの炊き出しを長時間に亘り行ったと聞きました。戸田マスジドの方々やイスラミックセンタージャパンの方々も炊き出し活動に何度も来られました。私が案内した例で、東京から単身で来られたエジプト人が、東松島市の避難所でカプサというアラブ料理を炊き出したこともありましたし、直接被災地各地に赴いてトルコ料理の炊き出しをしたトルコの方々、マレーシアやインドネシアの方々が関東方面から何度も来られ、各地（主に石巻や南三陸町）で炊き出しの活動をしておられました。

5 月末から 6 月初め頃、帰国したり、各地で避難していた留学生らが仙台に戻って来まして、巨大地震発生以前の状態になってきましたが、イランの留学生とかサウジアラビアやカタールの留学生らは、戻らなかったり、大阪の大学などへ変更した学生もおります。帰ってきた留学生らの一部は被災地での泥かきなどのボランティア活動に参加した者もおりました。この頃から、私とずっと一緒にマスジドで頑張ってくれたイギリス人のムスリムは東松島市で泥かきなどのボランティア活動をラマダン入りの直前までやって来ました。ボランティア活動をしなかった留学生らも、週末には炊き出しなどの活動をこれもラマダン入りまでやってました。

以上のように、仙台マスジドの行った事と言えば、被災地への道案内と救援物資の受け入れ、それらの配送、配布ぐらいでして、各地の皆様のご努力、ご献身に比べたら恥ずかしい限りです。願わくば皆さんの心が被災地の皆さんに伝わり、彼らの復興への力になってくれれば幸いです。

最後に、福岡マスジドさん、広島のムスリムの方々、大阪マスジドさん、名古屋の子供と女性のイスラームの会さん、群馬県の栄町マスジドさんそして MSA-J さんなど全国各地はもとより、世界各地のムスリム諸兄、友人知人らからも実に多くの義捐金や救援物資を送っていただいたり、実際に持ってきていただいたり、お見舞いの電話をいただきましたことに対し、被災地の住民の一人として、改めて、衷心より御礼申し上げます。本当に有難うございました。ジャザーカッラーハイルン！！

追加して、どうしても言わせていただきたいことは、あの巨大地震での被害が地震とその後の津波の被害だけなら、(勿論、これらだけでも甚大な被害と多くの犠牲者が出たのは事実なのですが)、多くの外国の皆さんがあのように慌てて逃げ帰ることはなかったのかもしれません。福島の原発被害から派生した重大な問題がその主原因だと思います。そうした中、私達と一緒に国内に留まり、しかも献身的に救援活動をしてくれた外国の方々がいたことを私達日本人は忘れてはならないと思います。